

の歌までとす。此年月を始と終の年月と假定して。その間を數へ見れば。歌の記録に残りたる生活の間。四十九年の長きにわたれり。然れども其天平寶字三年より没年の延暦四年までは。なほ二十六年の長日月を餘したれば。其間によみたる歌もさう多かりしならん。たゞ後世の勅撰歌集中に傳はりたる短歌の外には。萬葉集以後たいて其作を見る能はざるころ。文學歴史中最大の遺憾なれ。されど無きものはせんかたなし。有る歌に就いて猶りれよりも上乘の大作ありしかを想像せんこと。いさゝか以て其靈を慰むる所以か。さるにても四十九年間の大作佳調を殆ど網羅して示したる。萬葉集の功ころ最も多謝すべきものなれ。

### 第二十章 韻文の作例

過近江荒都作歌

柿本人麿

玉だすき 祓火の山の 榎原の 聖の御代ゆ  
生れましう 神のことく 櫻の木の いやつきくくに

天の下 知らしめしを 空みつ 倭を措き  
青によし 奈良山を越え いかさまに 思ほしめせか  
天ぞかる 鄙にはあれど 岩はしの 近江の國の  
さゝ波の 大津の宮に 天の下 知らしめしけむ  
天皇の 神のみことの 大宮は ことと聞けども  
大殿は ことといへども 春草の 茂く生ひたる  
霞立つ 春日の霧れる 百礮城の 大宮どころ  
見れば悲むも

#### 反歌

さゝ波の 滋賀の幸崎 幸くあれど  
大宮人の 舟まちなねつ  
さゝ波の 滋賀の大わた 淀むとも  
むかしの人に 又も逢はめやも (萬葉集)

幸于吉野宮之時作歌 同 人

やすみしよ 吾大君の

國はしも さはにぬれども

御心を 吉野の國の

宮柱 太敷きませば

船並めて 朝川わたり

此川の 絶ゆる事なく

岩ばしる 瀧の都は

反歌

見れど飽かぬ 吉野の川の 常滑の

絶ゆる事なく 又かへり見む (萬葉集)

又

やすみしよ 吾大君の

吉野川 瀧つ河内に

登り立ち 國見をすれば

同 人

神ながら 神さびせすと

高殿を 高知りまして

壘なはる 青垣山の

山神の 奉る御調と

秋立てば 紅葉かざせり

大御食に 仕へ奉ると

下つ瀬に 小網さしわたし

神の御代かも

反歌

山川も よりてつかふる 神ながら

瀧つ河内に 舟出せずかも (萬葉集)

高市皇子尊城上殯宮之時作歌 同 人

かけまくも ゆくしきかも

飛鳥の 眞神の原に

かしこくも 定め給ひて

やすみしよ 吾大君の

眞木立つ 不破山こねて

言はまくも あやに畏き

久方の 天つ御門を

神さぶと 岩隠ります

聞き食す 背面の國の

狛劍 わざみが原の

春べは 花かざしもち

ゆふ川の 神も

上つ瀬に 瀬川を立て

山川も 依りてつかふる

行宮に 天降りいまして  
 食國を めしたまひて  
 まつろはぬ 國を治めと  
 大御身に 太刀取り帯ばし  
 御軍を あともひたまひ  
 雷の 聲を聞くまで  
 敵見たる 虎か吼ゆると  
 さぶげたる 旗の靡きは  
 野毎に つきてある火の  
 取り持てる 弓弭の騒ぎ  
 つもじかも いまきわたると  
 引き放つ 矢の繁けく  
 露霜の 消なば消ぬべく  
 度會の 齋宮ゆ

天の下 治め給ひ  
 ちはやぶる 人を和せと  
 皇子ながら 任せ給へば  
 大御手に 弓取り持たし  
 調ふる 鼓の音は  
 吹きなせる 小角の音も  
 諸人の ねびゆるまでに  
 冬ごもり 春さりくれば  
 風のむた 靡くが如く  
 み雪ふる 冬の林に  
 思ふまで 聞きのかしこく  
 大雪の 亂れて來れ  
 行く鳥の 争ふはしに  
 神風に いぶき散はし

天雲を 日の目も見せず  
 定めてし 瑞穂の國を  
 やすみしと 吾大君の  
 萬代に しかしもあらむと  
 吾大君 皇子の御門を  
 つかはしと 御門の人も  
 埴安の 御門の原に  
 鹿じもの いはひ伏しつと  
 大殿を ふりさけみつと  
 さもらへど 侍ひかねて  
 嘆きも いまだ過ぎぬに  
 ことさへぐ 百濟の原ゆ  
 あさもよひ 城上の宮を  
 神ながら しづまりましぬ

常闇に 覆ひ給ひて  
 神ながら 太敷きまして  
 天の下 まをしたまへば  
 木綿花の 榮ゆる時に  
 神宮に 装ひまつりて  
 白妙の 麻衣きて  
 茜さす 日のことく  
 ぬば玉の 夕になれば  
 鶉なす いはひもとほり  
 春鳥の さまよひぬれば  
 思ひも いまだ盡きねば  
 神葬り 葬りいまして  
 常宮と 高くまつりて  
 然れども 吾大君の

萬代と 思ほしめして

作らしと 香山の宮

萬代に 過ぎむともへや

天のごと ふりさけみつゝ

玉だすき 掛けて忍ばむ

かしこかれども

反歌

久方の 天しらしぬる 君ゆゑに

日月も知らず 戀ひわたるかも

埴安の 池のつゝみの 隠沼の

ゆくへを知らに 舍人はまごふ (萬葉集)

羈旅歌

同じ人

王藻川の 敏馬を過ぎて 夏草の

野島が崎に 舟ちかづきぬ

淡路の ぬじまが崎の 濱風に

妹がむすびし 紐ふきかへす

荒妙の 藤江が浦に 鱧釣る

ともし火の 明石の大門に 入らむ日や 海人とか見らむ 旅ゆく吾を

天さかる 鄙の長路ゆ 戀ひくれば 家のおたり見ず

飼飯の海 庭よく有らし 対鷹の 明石の門より 倭島みゆ

亂れ出づる見ゆ 海人の釣舟 (萬葉集)

近江の海 題しらず 心もしぬに 古れもほゆ (萬葉集)

夕波千鳥 汝が鳴けば 任上野國司時至駿河淨見埼作歌

同 じ 人

廬原の 清見が崎の 三穂の浦の 物もひもなし

田口益人

畫みれど あかぬ田子の浦 大君の

みことかじこみ 夜見つるかも (萬葉集)

題しらさず

僧辨基

まつち山

夕越わゆきて 盛崎の

すみだがはらに ひとりかも寐む (萬葉集)

題しらさず

沙彌滿誓

世の中を

何にたどへむ 朝びらき

こぎにし船の 跡なきがごと (萬葉集)

還入故郷家即作歌

大伴旅人

人も無き

空しき家は 草枕

旅にまさりて 苦しかりけり

妹として

二人つくりし 吾山は

木高く繁く なりにけるかも

吾妹子が

植えし梅の木 見ることばに

心むせつゝ 涙しながる (萬葉集)

贈大貳丹比縣守卿遷任民部卿歌

同 心人

君がため

醸みし待酒 安の野に

ひとりや飲まむ 君なしにして (萬葉集)

題らしさず

阿部廣庭

去年の春

いことして植えし 吾宿の

若木の梅は 花さきにけり (萬葉集)

令反惑情歌

山上憶良

或有人。知敬父母。忘於侍養。不顧妻子。輕於脫履。自稱畏俗。先生。怨氣。雖揚霄雲之上。身體猶在塵俗之中。未驗修行得道之聖。蓋是亡命山澤之民。所以指示三綱。更開五教。遠之。以歌。令反其惑。歌曰。

父母を 見れば尊し

妻子みれば めぐしうつくし

世の中は かくぞことわり もちどりの かゝらはじもよ  
 行方知らねば 穿履を 脱ぎつることく  
 踏みぬぎて ゆくちふ人は 岩木より 生り出し人か  
 汝が名のらさね 天へゆかば 汝がまにく  
 地ならば 大君います 此の照らす 日月の下は  
 天雲の 向伏す極み 谷ぐぐの さわたる極み  
 聞き食す 國のまほらぢ かにかくに 欲しきまにく  
 しかにはあらじか

反歌

久方の 天路は遠し なほくくに

家にかへりて 業をしまさに (萬葉集)

爲熊凝述其志歌

同 心 人

大伴君熊凝者肥前國益城郡人也。年十八歲。以天平三年六月十七日爲相摸使某國司官位姓名從人。參向京都爲

天不幸。在路獲疾。即於安藝國佐伯郡高庭驛家身故也。臨終之時長嘆息曰。傳聞假合之身易滅。泡沫之命難駐。所以千聖已去。百賢不留。況乎凡愚微者。何能逃避。但我老親並。在庶室。待我過日。自有傷心之恨。望我違時。必致哀明之泣。哀哉我父。痛哉我母。不患一身向死之途。唯悲二親在生之苦。今日長別。何世得覲。乃作歌六首而死。其歌曰。

内日さす 宮へのぼると たらちしや 母が手はなれ  
 常知らぬ 國のねくかを 百重山 越えて過ぎゆき  
 いつしかも 都を見むと 思ひつゝ 語らひをれど  
 己が身し 痛はしければ 玉銚の 道の隅回に  
 草たをり 柴とり敷きて 床じもの 打ちこい伏して  
 思ひつゝ 嘆き伏せらく 國にあらば 父とり見まし  
 家にあらば 母とり見まし 世の中は 斯くのみならし  
 犬じもの 道に伏してや 命すぎなむ  
 たらちしの 母が目見ずて ねほくしく

常知らぬ 道の長手を くれくど  
うづち向きてか 吾わするらむ

家にありて 母が取り見ば なぐさむる  
いかにか行かむ かりてはなしに

出でゝ行きし 目を數へつゝ 今日々々ど  
心はあらまし 死なば死ぬとも

一世には 二たび見ぬ 父母を  
吾を待たすらむ 父母をはも

ねきてや長く あが別れなむ (萬葉集)

貧窮問答歌

同じ人

風まじり 雨ふる夜の

雨まじり 雪ふる夜は

すべもなく 寒くしあれば

堅壁を とりつゝしろひ

糟湯酒 うちすゝろひて

しはぶかひ 鼻ひしくぐに

しかと有らぬ 髭かきなでゝ

吾をねきて 人はあらじと

ほころへど 寒くしあれば

麻衾 ひきかぶふり

布肩衣 ありのことぐ

きりへども 寒き夜すらを

吾よりも 貧しき人の

父母は 飢ゑ寒からむ

妻子どもは 乞ひて泣くらむ

此時は いかにしつゝか

汝が世はわたる

天地は 廣しといへど

あがためは 狭くやなりぬる

日月は 明しといへど

あがためは 照りや給はぬ

人皆か 吾のみや然る

わくらははに 人とはあるを

人なみに あれも生れるを

綿もなき 布肩衣の

海松のごと わづけさがれる

かぶぶのみ 肩に打ち掛け

伏庵の 曲庵の内に

直土に 藁ときしきて

父母は 枕のかたに

妻子どもは 足のかたに

かくみおて 憂へさまよひ

竈には 煙ふきたてず

既には 蜘蛛の巣かきて

飯炊く ことも忘れて

ぬわ鳥の のぎよひをるに いとのきて 短きものを  
 端切ると いへるが如く しもと取る 里長が聲は  
 闔處まで 來立ち呼ばひぬ かくばかり すべなきものか  
 世の中の道  
 世の中を ケしとやさしと 思へども

飛び立ちかねつ 鳥にしあらねば (萬葉集)

好去好來歌

同じ人

神代より	言ひ傳てけらく	空見つ	倭の國は
皇神の	いつくしき國	言靈の	幸ふ國と
語り継ぎ	言ひ継がひけり	今の世の	人もことごとく
目の前に	見たり知りたり	人さには	満ちてはあれど
高ひかる	日の朝庭には	神ながら	寵のさかりに
天の下	まをし給ひし	家の子と	撰び給ひて
大命	いたゞきもちて	唐土の	遠き境に

つかはされ	まかりいませ	海原の	邊にも沖にも
神づまり	うしはきいます	もろくの	大御神たち
船の舳に	みちびきまをし	天地の	大御神たち
倭の	大國靈	久方の	天のみうらゆ
天翔り	見わたし給ひ	ことをへて	歸らむ日には
又更に	大御神たち	船の舳に	御手うちかけて
墨繩を	はへたる如く	あてかをし	血鹿の崎より
大伴の	御津の濱びに	たゞはてに	御舟ははてむ
つゝみなく	幸くいまして	早かへりませ	

反歌

大伴の 御津の松原 かきはきて  
 われ立ち待たむ はや歸りませ  
 難波津に 御舟はてぬと 聞わこば  
 紐ときささけて 立ちはじりせむ (萬葉集)



望不盡山歌

山部赤人

天地の わかれし時ゆ

神さびて 高く貴き

駿河なる 富士の高嶺を

天の原 ふりさけみれば

渡る日の 影もかくろひ

照る月の 光も見えず

白雲も いゆきはごかり

時じくず 雪はりける

語り継ぎ 言ひ継ぎゆかも

富士の高嶺は

反歌

田子の浦ゆ うちいでと見れば 眞白にぞ

富士の高嶺に 雪はふりける (萬葉集)

題しらず

同じ人

わが宿に 韓藍蒔き生し 枯れぬれど

こりずて又も 蒔かむとぞ思ふ (萬葉集)

題しらず

同じ人

やすみしと 吾大君の

神ながら 高知らしぬる

稻見野の 大海の原の

荒妙の 藤井の浦に

鮪釣ると 海人舟さわぎ

鹽焼くと 人づさはなる

浦をよみ うべも釣はず

濱をよみ うべも鹽焼く

ありがよひ 見ますもしるし

清き白濱

反歌

沖つ波 邊波しづけみ いさりすと

藤江の浦に 舟がさわげる

稻見野の 淺茅れしなべ さぬる夜は

けながくしあれば 家し忍ばゆ

明石瀉 沙干の道を 明日よりは

下るまじけむ 家近づけば (萬葉集)

幸千紀伊國時作歌

同じ人

やすみしと わご大君の

常宮と つかへまつれる

左日鹿野ゆ うがひに見ゆる 沖つ島 清きなぎさに

風ふけば 白波さわぎ 潮ひれば 玉藻かりつゝ  
神代より しかづたふとき 玉津島山

反歌

れきつしま 荒磯の玉藻 潮ひみち  
いかくろひなば 思ほえむかも  
若の浦に しほみちくれば 瀉を無み

蘆邊をさして 田鶴なきわたる (萬葉集)

至伊豫温泉作歌

同じ人

天皇の 神のみことの 敷きます 國のことく  
湯はしも さはにあれども 島山の よろしき國と  
ことしかも 伊豫の高嶺の いさにはの 岡に立たして  
歌しぬび 言しぬびせし 御湯の上の 木村を見れば  
臣の木も 生ひ織ぎにけり 鳴く鳥の 聲もかはらず  
遠き代に 神さびゆかも いでましどころ

反歌

もろしきの 大宮人の 饒田津に

船乗しけむ 年の知らなく (萬葉集)

登神岳作歌

同じ人

みもろの 甘南備山に 五百枝さし しに生ひたる  
櫻の木の いやつきくは 玉かづら 絶ゆる事なく  
ありつゝも 止まず通はむ 飛鳥の ふるき都は  
山高み 川とほしろし 春の日は 山し見がほし  
秋の夜は 川しさやけし 朝雲に 田鶴は亂れ  
夕霧に かはづは騒ぐ 見ること 音のみ泣かゆ  
いにしへ思へば

反歌

あすか川 川淀さらず 立つ霧の

おもひすぐへき 戀にあらなくに (萬葉集)

過勝鹿眞間娘子墓時作歌 同心人

いにしへに ありけむ人の

倭文幡の 帯ときかへて

伏屋立て つまごひしけむ

かつしかの 眞間の手兒名が

奥つ城を こゝと聞けども

眞木の葉や 茂くあるらむ

松が根や 遠く久しき

言のみも 名のみも吾は

忘れなくに

反歌

吾も見つ 人にも告げむ かつしかの

眞間の手兒名が ねくつきどころ

かつしかの 眞間の入江に 打ちなびく

玉藻刈りけむ 手兒名し思ほゆ (萬葉集)

羈旅歌

旅にして 物こひしきに 山もその

高市黑人

赤の緒舟 沖にこぐ見ゆ

櫻田へ 田鶴なきわたる 愛知洞

しはつ山 うちこね見れば 笠縫の

磯の崎 こそたみゆけば 近江の海

わが舟は 比良のみなとに 漕ぎはてむ

いづくにか 吾は宿らむ 高島の

勝野の原に この日くれなば (萬葉集)

苦しくも 降りくる雨か 三輪が崎

さぬのわたりに 家もあらなくに (萬葉集)

題しらす

長 奥 麿

挽歌

葛井子老

葛井子老

挽歌

葛井子老

天地と 共にもがもと 思ひつゝ ありけむものを  
 はしけやし 家を離れて 波のうへゆ なづさひきにて  
 あら玉の 月日も來經ぬ 雁がねも つぎて來鳴けば  
 たらちねの 母も妻等も 朝露に 裳の裾ひつち  
 夕露に 衣手ぬれて 幸くしも あるらむ如く  
 出で見つゝ 待つらむ物を 世の中の 人の嘆は  
 相思はぬ 君にあれやも 秋萩の 散らへる野邊の  
 初尾花 假庵に暮きて 雲ばなれ 遠き國への  
 露霜の 寒き山邊に 宿りせるらむ

反歌

はしけやし 妻も子どもゝ たかくぐに  
 待つらむ君や 島がくれぬる  
 もみぢ葉の 散りなむ山に 宿りぬる  
 君を待つらむ 人しかなしも (萬葉集)

角鹿津乘船時作歌

笠 金 村

越の海の 角鹿の濱ゆ 大舟に 眞楫ぬきねろし  
 いさなどり 海路に出でゝ あへぎつゝ わが漕ぎゆけば  
 大丈夫の 手結が浦に 海人少女 沙やく烟  
 草枕 旅にしあれば 獨して 見るしるしなみ  
 海神の 手に巻かしたる 玉だすき かけし忍びつ  
 倭島根を

反歌

越の海の たゆひの浦を 旅にして 見れば乏しき やまと思ひつ (萬葉集)

幸子芳野離宮時作歌

同 心 人

足引の みやまもさやに 落たぎつ 芳野の川の  
 河の瀬の 清きを見れば 上邊には 千鳥しば鳴き  
 下邊には かはづ妻呼ぶ もとじきの 大宮人も

をちこちに しむはしめれば 見ることには あやに乏しき  
 玉かづら 絶ゆる事なく 萬代に かくしむがもと  
 天地の 神をぞいのる かしこかれども

反歌

よろづよに 見ともあかめや みよしぬの  
 たぎつかふちの 大宮どころ  
 人みな の 命も吾も みよしぬの

たぎのとはの 常ならぬかも (萬葉集)

幸紀伊國之時爲贈從駕人所詠娘子作歌

同 人

天皇の いでましにまに ものふの 八十伴のをと  
 出でゆきし うつくし夫は 天飛ぶや 輕の道より  
 玉だすき 血傍を見つゝ あさもよし 紀路に入り立つ  
 待乳山 越ゆるも君は もみち葉の 散り飛ぶ見つゝ

親しくも 吾をば思はず 草まくら 旅をよろしと  
 思ひつゝ 君はあらむと ありくには かつは知れども  
 しかすがに 黙もねあらねば わがせこが ゆきのまに  
 追はむとは 千度思へど たわやめの 吾身にしめれば  
 道守の 問はむ答を いひやらむ すべを知らにと  
 立ちてつまづく

反歌

ねくれおて、戀ひつゝあらずは 紀の國の  
 妹脊の山に あらましものを  
 吾脊子が あと踏みもとめ 追ひゆかば

紀の關守は とがめてむかも (萬葉集)

香具山歌

鳴 足 人

天降りつく 天の香具山 霞立つ 春にいたれば  
 松風に 池波立ちて 櫻花 このくれしげに

沖邊には 鷗妻呼び  
百礮城の 大宮人の  
楫棹も 無くてさぶしも  
邊つ邊には ちぢもら騒ぎ  
退り出て 遊ぶ舟には  
こぐ人なしに

反歌

人ががず 有らくもしるし 潜きする  
鷺鷥とたかへと 舟の上に住む  
いつのまも 神さびけるか 香具山の

鐘杉がもとに 苔むすままでに (萬葉集)

下筑紫國時作歌

丹比笠麿

たをやめの 櫛笥に乘れる 鏡なす 御津の濱邊に  
さにづらふ 紐解きさけず 吾妹子に 戀ひつゝ居れば  
あけぐれの 朝霧がくり 鳴く田鶴の 音のみし泣かゆ  
わが戀ふる 千重の一重も 慰もる 心もあれやと  
家のあたり 吾立ち見れば 青旗の 葛城山に

たなびける 白雲がくり 天さかる 鄙の國邊に  
たが向ふ 淡路を過ぎ 粟島を 背に見つゝ  
朝和に 水手の聲よび 夕和に 楫の音しつゝ  
波の上を いゆきさくみ 岩の間を いゆきもとほり  
いなみつま 浦回をすきて 鳥じもの なづさひゆけば  
家の島 荒磯のうへに うちなびき しごに生ひたる  
なのりうも などかも妹に 告らず來にけむ

反歌

白妙の 袖ときかへて 歸り來む

ほどをかぢへて 行きてこましを (萬葉集)

登筑波岳作歌

丹比國人

鳥が鳴く 東の國に 高山は さはにあれども  
二神の たふとき山の 山なみの 見がほし山と  
神代より 人の言ひ繼ぎ 國見する 筑波の山を

冬ごもり 時じく時と  
雪消する 山道すらを

見ずていなば まして戀しみ  
なづみずわがこし

反歌

つくはねを ようのみ見つゝ ありかねて

雪げの道を なづみこしかも (萬葉集)

應詔歌

御民われ 生けるしるしあり 天地の

犬養岡麿

悲嘆尼理願死去作歌

大伴坂上郎女

栲角の 新羅の國ゆ

人言を よしと聞かして

どひさくる 族はらから

なき國に 渡りきまして

天皇の 敷きます國に

内日さす 都じみゝに

里家は さはにあれども

いかさまに 思ひけめかも

つれもなき 佐保の山邊に

泣く子なす 慕ひきまして

敷妙の 家をも作り

荒玉の 年の緒ながく

住まひつゝ いましゝものを

生ける人 死ぬちふ事に

まぬかれぬ 物にしあれば

頼めりし 人のことごとく

草枕 旅なるほどに

佐保川を 朝川わたり

春日野を うがひに見つゝ

足引の 山邊をさして

夕間と 隠れましぬれ

言はむすべ せむすべ知らに

たもとほり たゞ獨して

白妙の 衣手ほさず

嘆きつゝ わが泣く涙

有間山 雲居たなびき

雨に降りきや

反歌

とどめぬ 命にしあれば 敷妙の

家をば出でゝ 雲がくりにき (萬葉集)

題しらず

同じ人

久方の 天の露霜 ねきにけり

家なる人も 待ち戀ひぬらむ (萬葉集)  
從跡見莊贈賜留宅女子大嬢歌 同し人

常世にと 吾ゆかなくに 小金門に ものがなしらに  
 思へりし 吾子の刀自を ぬば玉の 夜晝といはず  
 思ふにし 吾身は瘦せぬ 嘆くにし 袖さへぬれぬ  
 かくばかり もとなし戀ひば 故郷に 此月ごろも  
 ありがてましを

反歌

朝髪あさかみの おもひみだれて かくばかり

汝姉ななが戀ふれず 夢に見えける (萬葉集)

與姪家持從佐保還歸西宅歌 同し人

わがせこが 着る衣ひうすし 佐保風は

いたくな吹きそ 家に至るまで (萬葉集)

攝津國斑田史生丈部龍鷹自經死之時作歌

大伴三中

天雲 <small>あまぐも</small> の	向伏 <small>むかひ</small> す國の	ものゝふと	いはれし人は
天皇 <small>あまの</small> の	神のみかどに	外重 <small>とほむね</small> に	立ちさもらひ
内重 <small>うちむね</small> に	つかへまつりて	玉かづら	いや遠長 <small>とほなが</small> く
祖 <small>いづ</small> の名も	繼 <small>ついで</small> ぎゆくものと	母父 <small>ははちち</small> に	妻に子どもに
語らひて	立ちにし日より	たらちねの	母のみことは
齋 <small>いはい</small> 登 <small>のぼ</small> を	前にすゑねきて	一手 <small>ひとて</small> には	木綿 <small>ゆふ</small> とりもち
一手 <small>ひとて</small> には	和幣 <small>わなへ</small> まつり	たひらけく	眞幸 <small>まこと</small> くませと
天地 <small>あめつち</small> の	神にこひのみ	いかならむ	年月日 <small>としづひ</small> にか
躑躅 <small>つづむ</small> 花	にほへる君が	引く網 <small>ひきあみ</small> の	なづさひこむと
立ちておて	待ちけむ人は	大君 <small>おほきみ</small> の	みことかしこみ
押し照る	難波 <small>なにわ</small> の國に	あら玉 <small>あらたま</small> の	年ふるまでに
白妙 <small>しろたへ</small> の	衣手 <small>ころもて</small> ほさず	朝夕 <small>あすけ</small> に	ありつる君は
いかさまに	思ひませか	空蟬 <small>うつせみ</small> の	をしき此世を



露霜の ねきてゆきけむ

時ならずして

反歌

きのふこり 君はありしか 思はずに

濱松のうへに 雲とたなびく

いつしかと 待つらむ妹に 玉づさの

言だに告げず いにし君かも (萬葉集)

石田王卒之時作歌

丹生女王

なゆ竹の とをよる皇子

さにづらふ わが大君は

こもりくの 初瀬の山に

神さびに いつきいますと

玉梓の 人言ひつる

あよづれか わが聞きつる

たはことか わが聞きつるも

天地に 悔しきことの

世の中の 悔しきことは

天雲の ろくへのきはみ

天地の 至れるまでに

杖つきも つかずも行きて

夕占問ひ 石トもちて

わが宿に 御諸を立て

枕邊に 齋爰をする

竹玉を 間なく貫き垂れ

木綿手繩 腕にかけて

天なる さくらの小野の

七相管 手に取りもちて

久方の 天の川原に

出で立ちて みうきてまじを

高山の 殿の上に

いませつるかも

反歌

あよづれの たはことかも 高山の

いはほのうへに 君がこやせる

石上 布留の山なる 杉村の

思ひ過ぐべき 君ならなくに

題こららず

厚見王

かはづ鳴く 甘南備川に 影みえて

いまや咲くらむ 山吹の花 (萬葉集)

幸于難波宮之時歌

船 王

眉のごと 雲井に見ゆる 阿波の山

かけて漕ぐ舟 泊しらずも (萬葉集)

幸于難波宮之時歌

守部王

兒等<sup>こら</sup>があらば 二人きかむを 沖つ洲に

鳴くなる田鶴の あかつきの聲 (萬葉集)

月歌

藤原八束

待ちがてに わがする月は 妹<sup>い</sup>が着る

三笠の山に 隠りてありけり (萬葉集)

和遊覽布勢水海賦

大伴池主

藤波は 咲きて散りにき

卯の花は 今ずさかりと

足引の 山にも野にも

時鳥<sup>ときすず</sup> 鳴きしとよめば

うちなびく 心もしぬに

うこそしも うらごひしみと

思ふぞち 馬うちむれて

たづさはり 出で立ち見れば

射水川<sup>いづみ</sup> みなとの洲鳥<sup>すず</sup>

朝なぎに 瀧にあさりし

沙滿てば 妻<sup>つま</sup>呼びかはす

ともしきに 見つゝ過ぎゆき

しぶたにの 荒磯<sup>あらいそ</sup>の崎に

沖つ波 よせくる玉も

かたよりに 鬘<sup>かむら</sup>につくり

妹<sup>い</sup>がため 手に巻きもちて

うらぐはし 布勢<sup>ふせ</sup>の水海に

海人<sup>うら</sup>舟に 真楫<sup>まかぢ</sup>櫂ぬき

白妙の 袖ふりかへし

あともひて 吾<sup>わが</sup>こそゆけば

をふの崎 花ちりまがひ

渚<sup>なぎさ</sup>には 蘆<sup>あし</sup>鴨<sup>かひ</sup>さわぎ

さざれ波 立ちてもおても

こぎめぐり 見れども飽かず

秋さらば 紅葉の時に

春さらば 花のさかりに

かもかくも 君がまにまど

かくしころ 見もあきらめと

絶ゆる日あらめや

白波の よせくる玉も 世のあひだも

つぎて見に来む 清き滾びを (萬葉集)

見禰上瞿麥花作歌

大伴家持

秋さらば 見つゝ忍<sup>しの</sup>べと 妹<sup>い</sup>が植<sup>う</sup>ゑし

宿のなでしこ 咲きにけるかも (萬葉集)

悲緒未息更作歌

同じ人

佐保山に たなびく霞 みるごとに

妹を思ひでよ 泣かぬ日はなし

むかしとや ようにも見しか 吾妹子が

奥つ城と思へば はしき佐保山 (萬葉集)

遊覽布勢水海賦

同じ人

ものゝふの 八十伴男の

思ふどち 心やらむと

馬並めて うちうちぶりの

白波の 荒磯によする

しぶたにの 崎たもとほり

松田江の 長濱すきて

うなび川 清き瀬ごとに

鶴川立ち かゆきかくゆき

見つれども うこも飽かばと

布施の海に 舟浮けすゑて

沖へ漕ぎ 邊にこそ見れば

渚には あぢむらさわぎ

島回には 木ぬれ花さき

こゝばくも 見のさやけきか

玉櫛等 ふたがみ山に

はふ葛の ゆきは別れず

ありがよひ いや年のほに

思ふどち かくし遊ばむ

今も見るごと

布勢の海の 沖つしらなみ ありがよひ

いや年のほに 見つゝしぬばむ (萬葉集)

賀陸奥國出金詔書歌

同じ人

葦原の 瑞穂の國に

天降り 知らしめしける

天皇の 神のみことの

御代かさね 天の日嗣と

知らしくる 君のみよく

敷きませる 四方の國には

山川を 廣み厚みと

たてまつる 御調寶は

敷へ得ず 盡しもかねつ

然れども わが大君の

諸人を いざなひ給ひ

よき事を 初めたまひて

黄金かも 樂しけくあらむと

思ほして 下なやまずに

鳥が鳴く 東の國の

陸奥の 小田なる山に

黄金ありと 奏し給へれ	御心を 明らめたまひ
天地の 神あひうづなひ	皇祖の 御靈たすけて
遠き代に なかりし事を	わが御代に 顯はしてあれば
御食國は 榮えむものと	神ながら 思ほしめして
ものゝふの 八十伴男を	まつろへの 任のまに
老人も 女童子も	しが願ふ 心足らひに
撫で給ひ 治め給へば	ことをしも あやに尊み
うれしけく いやと思ひて	大伴の 遠つ神祖の
その名をば 大久米主と	負ひ持ちて 仕へし官
海ゆかば 水漬く屍	山ゆかば 草むす屍
大君の 邊にこり死なめ	かへりみは せじと言立て
大丈夫の 清き其名を	古へよ 今のをつゝに
流さへる 祖の子どもぞ	大伴と 佐伯の氏は
人の祖の 立つる言立て	人の子は 祖の名絶たず

大君に まつろふものと	言ひ継げる 事の官が
梓弓 手に取り持ちて	劔太刀 腰に取り佩き
朝まもり 夕のまもりに	大君の 朝廷のまもり
吾をおきて 又人はあらじと	いや立て 思ひしまさる
大君の 命の幸を	聞けばたふとみ
反歌	
大丈夫の ころ思ほゆ 大君の	みことのさきを 聞けばたふとみ
大伴の 遠つかむおやの 奥津城は	しるく標め立て 人の知るべく
天皇の 御代さかむと 東なる	みちのく山に 黄金花さく (萬葉集)
橘歌	同じ人
かけまくも あやに畏し	天皇の 神の大御代に

田道間守 常世にわたり  
 時じくの 香の木實を  
 國もせに 生ひ立ち榮え  
 ほととぎす 鳴く五月には  
 少女等に 土産にも遣りみ  
 香しみ ねきて枯らしみ  
 手に巻きて 見れども飽かず  
 足引の 山の木ぬれば  
 橘の なれる其實は  
 み雪ふる 冬にいたれば  
 常磐なす いや榮ばえに  
 よろしなべ この橘を  
 名づけららじも

八矛もち まめでこも時  
 かじこくも 殘し給へれ  
 春されば 孫枝萌いつと  
 初花を 枝に手折りて  
 白妙の 袖にもこきれ  
 あゆる實は 玉にぬきつと  
 秋つけば 時雨の雨ふり  
 紅に にほひ散れども  
 ひたでりに いや見がほしく  
 霜れけども 其葉も枯れず  
 しかれこそ 神の御代より  
 時じくの 香の木實と

反歌

橘は 花にも實にも 見つれども

詠 霍公鳥並藤花

同じ人

桃の花 くなれぬ色に  
 青柳の 細き眉根を  
 少女等が 手に取り持たる  
 木のくれの しげき谷邊を  
 夕月夜 かりけき野邊に  
 立ちくると 羽振に散らす  
 引きよちて 袖にこきれつ  
 ほととぎす 鳴く羽ぶりにも

いやは時じくに なほし見がほし (萬葉集)  
 にほひたる 面輪のうち  
 ゑみまがり 朝影みつと  
 まり鏡 二上山に  
 呼びとよめ 朝飛びわたり  
 はるくぐに 鳴く時鳥  
 藤波の 花なつかしく  
 染まば染むとも  
 散りにけり

さかりすぐらし 藤波の花 (萬葉集)

陳防人悲別之情歌

同じ人

大君の 任のまにく  
 防人に わが立ちくれば

はるうばの 母のみことは 御装の裾 つみあげ搔き撫で  
ちくのみの 父のみことは 袴綱の 白鬚のうへゆ  
涙垂り なげきのたばく 鹿兒じもの たゞ一人して  
朝戸出の かなじき吾子 ちち玉の 年の緒ながく  
あひ見ずは 戀しくあるべし 今日だにも 言どひせむと  
惜みつゝ 悲しびいませ 若草の 妻も子ども  
をちこちに さはに圍みぬ 春鳥の 聲のさまよひ  
白妙の 袖なきぬらし たづさはり 別れがてにと  
引きとどめ 慕ひしものを 天皇の みことかしくみ  
玉銚の 道に出で立ち 岡の崎 いたむるごとに  
萬たび かへりみしつゝ はろくぐに 別れしくれば  
思ふうら 安くもあらず 戀ふるうら 苦しきものを  
うつせみの 世の人なれば たまきはる 命も知らず  
海原の かしこき道を 島づたひ いこぎ渡りて

ありめぐり 吾來るまでに  
つゝみなく 妻は待たせと  
幣まつり 祈りまうして  
八十楫ぬき 水手調へて  
家に告げこり

反歌

家人の 齋へにかあらむ たひらけく  
みりらゆく 雲も便と 人はいへど  
家づとに 貝が拾へる 濱波は  
島かげに わが舟はてゝ 告げやらむ  
使を無みや 戀ひつゝゆかむ

平けく 親はいまさぬ  
住の江の あが皇神に  
難波津に 舟を浮けすゑ  
朝びらき 吾は漕ぎでぬと

船出はしぬと 親に申さぬ  
家づとやらむ たづき知らずも  
いやしくぐに 高く寄すれど

諛族歌

同じ人

久方の 天の戸ひらき  
 天皇の 神の御代より  
 眞麿矢を 手挟み添へて  
 先に立て 鞆とりねほせ  
 ふみ通り 國まぎしつゝ  
 まつろへぬ 人をも和し  
 蜻蛉洲 やまとの國の  
 宮柱 太知り立て  
 天皇の 天の日嗣と  
 隠さはぬ 明き心を  
 つかへくる 祖の官と  
 うみの子の いや継々に  
 聞く人の 鏡にせむを

高千穂の 嶽に天降りし  
 櫛弓を 手握り持たし  
 大久米の 大夫武夫を  
 山川を 岩根さくみて  
 ちはやぶる 神をこそむけ  
 はき清め つかへまつりて  
 榎原の 畝傍の宮に  
 天の下 知らしめしける  
 つぎてくる 君の御代々々  
 天皇方に 極め盡して  
 言立て 授けたまへる  
 見る人の 語りつぎて  
 あたらしき 清き其名が

空言も 祖の名断つを

大丈夫の伴

ねほろかに 心れもひて  
 大伴の 氏と名に負へる  
 敷島の やまとの國に あきらけき

名にねふ伴のを 心つとめよ

劍太刀 いやと研ぐべし いにしへゆ

さやけく負ひて 來にし其名が (萬葉集)

藤原宮之役民作歌

よみ人しらす

やすみしと 吾大君  
 荒妙の 藤原がうへに  
 御殿は 高知らさむと  
 天地も よりてあれこり  
 衣手の 田上山の  
 物部の 八十氏川に  
 りを取ると 騒ぐ御民も

高ひかる 日の御子  
 食國を めしたまはむと  
 神ながら 思ほすなべに  
 岩ばしの 近江の國の  
 眞木さく 檜の嬌手を  
 玉藻なす 浮べ流せれ  
 家忘れ 身もたなしらす

鴨じもの 水に浮きおて  
 知らぬ國 より巨勢路より  
 書負へる 靈しき龜も  
 持ちこせる 眞木の嬌手を  
 上すらむ いろはく見れば

吾作る 日の御門に  
 吾國は 常世にならむ  
 新代と 泉の川に  
 百足らず 後々に作り  
 神ながらならし (萬葉集)

藤原宮御井歌

よみ人しらす

やすみしと わで大君  
 荒妙の 藤井が原に  
 壇安の 堤の上  
 やまとの 青香山は  
 春山と しみさび立てり  
 日の緯の 大御門に  
 耳無の 青香山は  
 宜しなへ 神さび立てり

高ひかる 日の御子  
 大朝廷 はじめたまひて  
 有り立たし 見し給へば  
 日の經の 大御門に  
 畝傍の この瑞山は  
 みづ山と 山さびいます  
 背面の 大御門に  
 名ぐはし 吉野の山は

影面の 大御門ゆ  
 高知るや 天の御影  
 水こりは 常しへならぬ

雲井にぞ 遠くありける  
 天知るや 日の御影の  
 御井の眞清水

短歌

藤原の 大宮づかへ あれつけや

少女が友は 乏しきろかも (萬葉集)

日並皇子尊宮舍人等慟傷作歌 (廿三首)

よみ人しらす

高光る わが日の皇子の 萬代に

國知らさまし 島の宮はも

島の宮 池のうへなる 放鳥

あらびなゆきり 君まさすとも

高光る わが日の皇子の いましせば

島の御門は 荒れざらましを



よりにみし 檀の岡も 君ませば

常つ御門と 宿直するかも

夢にだに 見ざりしものを ねほしく

宮出もするか 佐田の隈回を

天地と 共に終へむと 思ひつゝ

仕へまつりし 心たがひぬ

朝日照る 佐田の岡邊に 群れおつゝ

わが泣く涙 やむ時もなし

御立しゝ 島を見る時 庭たつみ

ながるゝ涙 とめずかねつる

橋の 島の宮には あかねども

佐田の岡邊に そのおしにゆく

御立しゝ 島をも家と 住む鳥も

あらびなゆきり 年かはるまで

御立しゝ 島の荒磯を 今日見れば

生ひざりし草 生ひにけるかも

とぐら立て 飼ひし雁の子 巢立ちなば

檀の岡に 飛びかへりこね

わが御門 千代とことばに 榮えむと

思ひてありし 吾も悲しむ

東の 瀧の御門に さもらへど

きのふもけふも 召す事もなし

水づたふ 磯の浦回の 岩躑躅

もくさく道を 又見なむかも

一日には 千度まゐりし 東の

瀧の御門を 入りがてぬかも

つれもなく 佐田の岡邊に 歸りおぼ

島の御橋に 誰か住はむ

朝ぐもり 日の入りゆけば 御立し

島にねりぬて 嘆きつるかも

朝日照る 島の御門に ねほしく

人音もせねば まうらがなしも

真木柱 ふとき心は ありしかど

此わがころろ 鎮めかねつも

毛衣を 春冬かたまけて いでまし

宇陀の大野は ねもほえむかも

朝日てる 佐田の岡邊に 鳴く鳥の

夜なきかはらふ 此年ごろを

やたころが 夜盡といはず 行く道を

われはことく 宮路にぞする (萬葉集)

志貴親王薨時作歌

梓弓 手に取り持ちて

大丈夫の さつ矢たばさみ

立ち向ふ 高圓山に

春野焼く 野火と見るまで

燃ゆる火を いかにと問へば

玉銚の 道くる人の

泣く涙 ひさめに降れば

白妙の 衣ひづちて

立ちとまり 吾に語らく

何しかも もとな言へる

聞けば 音のみし泣かゆ

語れば 心ぞ痛き

天皇の 神の御子の

いでましの 手火の光ぞ

こゝだ照りたる

短歌

高圓の 野邊の秋萩 いたづらに

咲きか散るらむ 見る人なしに

三笠山 野邊ゆく道は こきだくも

しづかに荒れたるか 久にあらなくに

詠不盡山歌

なまよみの 甲斐の國

うちよする 駿河の國と

こちくくの 國の真中ゆ 出で立てる 富士の高嶺は  
 天雲も いゆきはばかり 飛ぶ鳥も 飛びものぼらず  
 燃ゆる火を 雪もて消ち 降る雪を 火もて消ちつゝ  
 言ひも得ず 名づけも知らに あやしくも います神かも  
 石花海と 名づけてあるも うの山の つゞめる海が  
 富士川と 人のわたるも うの山の 水のたぎちが  
 日の本の 倭の國の 鎮とも います神かも  
 寶とも なる山かも 駿河なる 富士の高嶺は  
 見れどあかぬかも

反歌

富士の嶺に ふりねく雪は 六月の  
 望に消ぬれば うの夜ふりけり  
 富士の嶺を 高みかよこみ 天雲も  
 いゆきはばかり 棚引くものを (萬葉集)

傷惜寧樂京荒墟作歌

よみ人しらず

世の中を 常なきものと 今ぞ知る

奈良の都の うつろふ見れば (萬葉集)

悲寧樂故京郷作歌

よみ人しらず

やすみしと 吾大君の 高敷かす やまとの國は  
 天皇の 神の御代より 敷きませる 國にしあれば  
 生れまさむ 皇子のつぎく 天の下 知らしまさむと  
 八百萬 千年を兼ねて 定めけむ 奈良の都は  
 かぎろひの 春にしなれば 春日山 三笠の野邊に  
 櫻花 木のくれがくり 貌鳥は 間なくしばなき  
 露霜の 秋さりくれば いこま山 飛火が岡に  
 萩の枝を しがらみ散らし 小鹿男は 妻呼びとよめ  
 山みれば 山も見がほし 里みれば 里も住みよし  
 物部の 八十伴ののを うちはへて 里並み敷けば

天地の 依合のきはみ

萬代に 榮えゆかむを

思ひにし 大宮すらを

たのめりし 奈良の都を

新世の 事にしあれば

天皇の 引きのまに

春花の うつろひかはり

村鳥の 朝立ちゆけば

さす竹の 大宮人の

踏みならし 通ひし道は

馬も行かず 人も行かねば

荒れにけるかも

反歌

立ちかはり 古き都と なりぬれば

道の芝草 ながく生ひにけり

なつきにし 奈良の都の 荒れゆけば

出で立つ毎に なげきしまさる (萬葉集)

讚久邇新京歌

よみ人しらず

現神 わが大君の

天の下 八島の内に

國はしも 多くあれども

里はしも さはにあれども

山並の よろしき國と

川並の 立ち合ふ里と

山城の 鹿脊山の間

宮柱 ふとしき立て

高知らす 布當の宮は

川近み 瀬の音が清き

山近み 鳥が音とよむ

秋されば 山もどろに

小男鹿は 妻よびとよめ

春されば 岡邊もじかに

巖には 花さきをより

あなにやし 布當の原

あなたふと 大宮どころ

うべしこり 吾大君は

君のまに 聞し給ひて

さす竹の 大宮こゝと

定めけらしも

反歌

みかの原 ふたぎの野邊を 清みこそ

大宮こゝと 定めけらしも

山高く 川の瀬きよし 百代まで

神しみゆかむ 大宮どころ (萬葉集)

詠山

いにしへの事は知らぬを 吾見ても

よみ人しらず

久しくなりぬ 天のかぐ山 (萬葉集)

詠蘿

みよしぬの 青根が峰の 苦むしろ

よみ人しらず

誰か織りけむ 經緯なしに (萬葉集)

攝津作

しながどり 猪名野を來れば 有間山

よみ人しらず

夕霧たちぬ 宿はなくして (萬葉集)

羈旅作

人ならば 母が愛子ぞ あさもよし

紀の川のべの 妹と脊の山

玉津島 よく見ていませ 青によし

奈良なる人の 待ち間はどいにか

少女らが 織る機の上を 眞櫛もて

かきげ 栲島 波間より見ゆ

しかの海人の 鹽焼く烟 風をいたみ

立ちはのぼらず 山に棚引く (萬葉集)

臨時

曉と 夜がらす鳴けど この山の

よみ人しらず

こぬれが上は いまだ静けし

今年ゆく 新島守が 麻ごろも

肩のまよひは 誰か取り見む (萬葉集)

詠水江浦島子

よみ人しらず

春の日の 霞める時に

住吉の 岸に出でゐて

釣舟の とをらふ見れば

古の ことぞ思ほゆる

水の江の 浦島の子が

堅魚釣り 鯛釣りほこり

七日まで 家にも來ずて

海界を 過ぎて漕ぎゆくに

海神の 神の少女に  
 相かざらひ 事成りしかば  
 海神の 神の宮の  
 携はり 二人入りおて  
 永き世に ありけるものを  
 吾妹子に のりて語らく  
 父母に 事ものらひ  
 言ひければ 妹がいへらく  
 今のごと 逢はむとならば  
 うこらくに 固めし言を  
 家みれど 家も見かねて  
 あやしとぞ うこに思はく  
 垣もなく 家うせめやと  
 ものごと 家はあらむと

たまさかに いこそ向ひて  
 かきむすび 常世に至り  
 内のへの 妙なる殿に  
 老もせず 死もせずして  
 世の中の 痴れたる人の  
 しまらくは 家に歸りて  
 明日のごと 吾は來なむと  
 常世邊に 又かへりきて  
 この櫛笥 開くなゆめと  
 住吉に 歸りきたりて  
 里みれど 里も見かねて  
 家ゆ出でく 三年のほどに  
 この箱を 開きて見てば  
 玉櫛笥 すこし開くに

白雲の 箱より出でく  
 立ち走り 叫び袖ふり  
 たちまちに 心消失せぬ  
 黒かりし 髪も白けぬ  
 後つひに 命死にける  
 家どころ見ゆ

反歌

常世邊に 棚引きぬれば  
 こいまろび 足ずりしつゝ  
 若かりし 膚も皺みぬ  
 ゆなくは 息さへ絶えて  
 水の江の 浦島の子が

常世邊に 住むべきものを

劍太刀

己が心から おろや此きみ (萬葉集)

詠霍公鳥

よみ人しらす

鶯の 生卵の中に  
 己が父に 似ては鳴かず  
 卵の花の 咲きたる野邊ゆ  
 橘の花を居散らし

ほととぎす 獨うまれて  
 己が母に 似ては鳴かず  
 飛び歸り 來鳴きとよもし  
 ひねもすに 鳴けど聞きよし

幣はせむ 遠くな行きり わが宿の 花たちばなに  
住みわたれ鳥

反歌

かききらし 雨の降る夜を ほととどす

なきてゆくなり あはれうの鳥 (萬葉集)

登筑波山歌

よみ人しらす

草まくら 旅のうれへを

なぐさもる 事もあらむと

筑波嶺に 登りて見れば

尾花ちる 志筑の田居に

雁がねも 寒く來鳴きぬ

新治の 鳥羽の淡海も

秋風に 白波立ちぬ

筑波嶺の よけくを見れば

長きけに 思ひ積みこし

憂は思みぬ

遣唐使船發難波入海之時親母贈子歌

よみ人しらす

秋萩を 妻問ふ鹿こそ

一つ子 二つ子持たりといへ

鹿兒じもの わが獨子の

草まくら 旅にしゆけば

竹玉を しむに貫き垂れ

齋瓮に 木綿とりしで

いはひつゝ わが思ふ吾子

さきく有りこそ

反歌

旅人の やどりせむ野に 霜ふらば

わが子はぐゝめ 天の田鶴むら (萬葉集)

哀弟死去作歌

よみ人しらす

父母が 生しのままに

箸むかふ 弟のみことは

朝露の 消やすき命

神のむた 争ひかねて

葦原の 瑞穂の國に

家無みや 又かへりこぬ

遠つ國 夜見の境に

はふ葛の れのがむきく

天雲の 別れしゆけば

開夜なす 思ひまどはひ

射ゆ猪の 心をいたみ

葦垣の 思ひみだれて

春鳥の 音のみ鳴きつゝ

あぢさはふ 夜盡といはず

かぎろひの 心もねつゝ

嘆くわかれを

反歌

わかれても 又もあふべく おもほえば

心みだれて われ戀ひめやも

足引の 荒山中に ねくりねきて

かへらふ見れば 心ぐるしも (萬葉集)

詠勝鹿眞間娘子歌

よみ人しらず

鳥が鳴く

東の國に

いにしへに ありける事と

今までに 絶えず言ひくる

葛飾の 眞間のてこなが

麻衣に

青帯つけ

ひたさをく 裳には緋り着て

髪だにも 掻きは梳らず

杏をだに はかずゆけども

錦綾の 中につゝめる

齋子も 妹にしかめや

望月の 足れる面輪に

花のごと 笑みて立てれば

夏虫の 火に人るがごと

漆入に 舟こぐごとく

よしかぐれ 人のいふ時

幾ばくも 生けらぬものを

何すとか 身をたなしりて

波の音の さわぐ漆の

奥津城に 妹がこやせる

遠き代に ありける事を

昨日しも 見けも吾ごと

ねもほゆるかも

反歌

かつしかの まゝの井みれば 立ちならし

水を汲みけむ 手兒奈し思ほゆ (萬葉集)

見菟原處女墓歌

よみ人しらず

葦の屋の うなひ處女が

八年兒の 片生の時ゆ

をばなりに 髪たぐまでに

並び居る 家にも見えず

うつゆふの こもりて居れば

見てしごと いぶせむ時の

垣ほなす 人の問ふ時

ちぬ男 うなひ男の

伏屋たき すゝしきほひて

相呼ばひ しける時は

焼太刀の たかみ押しねり

白眞弓 鞠とりねひて



水に入り 火にも入らむと 立ち向ひ 競へる時に  
 吾妹子し 母にかたらく 倭文手巻 賤しき吾ゆゑ  
 大丈夫の あらうふ見れば 生けりとも 逢ふべくあれや  
 しくしろ 夜見に待たんと 隠沼の 下ばへたきて  
 うちなげき 妹がいぬれば ちぬ男 その夜夢に見  
 とりつぎき 追ひゆきければ ねくれたる うなひ男も  
 い仰ぎて 叫びねらび 足ざりし 牙噛みたけびて  
 もころ男に 負けては有らじと かきはきの 小太刀とりはき  
 ところづら とめゆきければ やからども いやりつとひて  
 永き代に 標にせむと 遠き代に 語り繼がむと  
 處女塚 中に作りねき 壯夫塚 こなたかなたに  
 作りねける 故由きとて 知らねども 新喪のごとも  
 音泣きつるかも

反歌

葦の屋の

うなひをどめが

奥津城を

塚の上の

木の枝なびけり

聞くがごと

ちぬをどこにし 依るべけらしも (萬葉集)

春雑歌

よみ人しらす

いにしへの

人の植ゑけむ 杉が枝に

かすみたなびく 春は來ぬらし

春雨に

あらうひかねて わが宿の

櫻の花は さきうめにけり

春日野に

煙立つ見ゆ 少女らし

春野のうはぎ 摘みて煮らしも (萬葉集)

秋雑歌

よみ人しらす

此ゆふべ

秋風ふきぬ 白露に

あらうふ萩の 明日さかも見む

庭草に 村雨ふりて こほろぎの

鳴くこゑ聞けば 秋づきにけり

天飛ぶや 雁のつばさの 覆羽の

いづく漏りてか 霜のふりけむ (萬葉集)

冬雜歌

よみ人しらず

足引の 山に白きは わが宿に

きのふの夕 ふりし雪かも

八田の野の 浅茅いろづく 有乳山

みねの泡雪 寒く降るらし (萬葉集)

寄物陳思

よみ人しらず

大船の 香取の海に 碇れろし

いかなる時か 物思はざらむ

かにかくに 物は思はず 飛彈人の

打つ墨繩の たゞ一道に

馬の音の ともすれば 松蔭に

出でし君かこ (萬葉集)

題しらず

よみ人しらず

斧とりて 丹生の檜山の

木こりきて 小舟に作り

眞楫ぬき 磯こぎたみつゝ

島づたひ 見れども飽かず

三吉野の 瀧もどろに

ねつる白波

題しらず

よみ人しらず

處女等が 麻笥に垂れたる

續麻なす 長門の浦に

朝なぎに 満ちくる沙の

夕なぎに よりくる波の

うの汐の いやますくゝに

うの波の いやしくくゝに

吾妹子に 戀ひつゝ來れば

あごの浦の 荒磯のうへに

濱菜つむ 海人少女等が

うながせる 領巾も照るがに

手にまける 玉もゆらゝに

白妙の 袖ふる見ねつ

相思ふらしも

反歌

あごの海の 荒磯のうへの さざら波

題しらず

わが戀ふらくは やむ時もなし (萬葉集)

みもろの

甘南備山ゆ そのぐもり 雨は降りきぬ

天ざらひ

風さへ吹きぬ 大口の 眞神の原ゆ

思ひつゝ

歸りにし人 家に到りきや

反歌

かへりにし

人を思ふと ぬば玉の

うの夜は吾も

いも寝かねてき (萬葉集)

上總國歌(東歌の内)

よみ人しらず

海上がたの

沖つ洲に

夏麻びく

舟はとがめむ さよふけにけり (萬葉集)

信濃國歌(東歌の内)

よみ人しらず

信濃路は

いまの聖道 刈ば根に

信濃なる

足踏ましむな 杵はけ吾春

千曲の川の

さざれ石も

伊香保風

君し踏みてば 玉とひろはむ (萬葉集)

吹く日吹かぬ日

ありといへど

あが戀のみし

時なかりけり (萬葉集)

薪こる

相摸國歌(東歌の内) よみ人しらず

鎌倉山の

木垂る木を

まつと汝がいは

戀ひつゝやあらむ

置きて

防人歌 よみ人しらず

往かば

妹はまがなし 持ちてゆく

梓の月の

月柄にもがも

ねくれわて

戀ひば苦しも 朝嶽の

君が弓にも ならまじものを

右二首問答

防人に 立ちし朝けの 門出に

たばなれをしみ 泣きし子等はも

蘆の葉に 夕霧たちて 鴨が音の

さむき夕し 汝をばしぬばも (萬葉集)

屬物發思歌

よみ人しらず

朝されば 妹が手に巻く

鏡なす 御津の濱びに

大船に 真楫しぬき

唐國に わたりゆかむと

たむかふ 敏馬をさして

汐待ちて 水脈引きゆけば

沖邊には 白波たかみ

浦回より こぎて渡れば

吾妹子に 淡路の島は

夕されば 雲おかくりぬ

さよふけて 行方を知らに

あが心 明石の浦に

舟とめて 浮寝をしつゝ

わたつみの 沖邊を見れば

漁する 海人の少女は

小舟乗り つらゝに浮けり

あかとき 沙みちくれば

蘆邊には 田鶴なきわたる

朝なごに 船出をせむと

舟人も 水手も聲呼び

鴉鳥の なづさひゆけば

家島は 雲井に見えぬ

あが思へる 心なぐやと

早く来て 見むと思ひて

大船を こぎ吾ゆけば

沖つ波 高く立ち來ぬ

よそのみに 見つゝ過ぎゆき

玉の浦に 舟をとめて

濱びより 浦磯を見つゝ

泣く子なす 音のみし泣かゆ

海神の 手綱の玉を

家づとに 家にやらむと

拾ひ取り 袖には入れて

返しやる 使なければ

持てれども しるしをなみと

又置きつるかも

反歌

玉の浦の 沖つ白玉 ひりへれど

またぞ置きつる 見る人を無み

秋さらば わが舟はてむ 忘貝

よせきて置けれ 沖つ白波 (萬葉集)

### 第二十一章 散文の作例

#### 大殿祭

高天原に神留ります。皇親神魯企神魯美の命もちて。皇御孫命を天津高御座にまかせて。天津熊の劍鏡を捧げ持ちたまひて。言壽ぎ宣ひし。皇が宇都の御子。皇御孫命。これの天津高御座にままして。天津日嗣を萬千秋の長秋に。大八洲豊葦原の瑞穂の國を。安國と平けく知ろしめすと。言寄しまつりたまひて。天津御量もちて。言問ひし岩根木根立。草の片葉をも言止めて。天降りたまひし食國天下と。天津日嗣しろしめす皇御孫命の御殿を。いま奥山の大峽小峽に立てる木を。齋部の齋斧を持ちて伐り取りて。本末をば山の神に祭りて。中間を持ち出で来て。齋鉏を持ちて齋柱立て。皇御孫命の天の御孫日御孫と造り仕へまつれる瑞の

御殿を。汝屋船命に天つ奇護言もちて言壽ぎ鎮め白さく。

これの敷きます大宮所の底津岩根の極み。下津網根はふ虫の禍なく。高天原は青雲のたなびく極み。天の血垂飛ぶ鳥の禍なく。堀り堅めたる柱桁梁戸牖の錯ひ動き鳴ることなく。引き結べる葛目の緩び。取り替ける草の噪なく。御床つひのさやぎ。夜目のいすき。いづとしき事なく。平けく安らけく護りまつる神の御名を白さく。屋船久々運命。屋船豊宇氣姫命と。御名をば稱へまつりて。皇御孫命の御世を堅磐に常磐に護りまつり。五十榎御世の足らし御世に。手長の御世と幸へまつるに依りて。齋玉作等が持ち齋はり持ち淨まはり造り仕へまつれる。瑞の八尺瓊の御ふきの五百つ御統の玉に。明和幣照和幣を附けて。齋部宿禰某が弱肩に太手櫛とりかけて。言壽ぎ鎮めまつることの漏れ落ちも事をば。神直日命大直日命聞き直し見直して。平けく安らけく知ろしめせと白す。言別きて白さく。大宮賣命と御名を申す事は。皇御孫命の同じ殿の内に塞がりまして。参入り退出る人の選び知らし。神等のいすろこび荒びま

すを。言直し和じまして。皇御孫命の朝の御膳夕の御膳つかへまつる。比禮懸くる伴の緒手懸懸くる伴の緒を。手のまがひ足のまがひ爲さしめず。親王諸王諸臣百官の人等を。おのがむきくあらしめず。あしき心きたなき心なく。宮進めに進め宮いらしみにいらしめしめて。科過あらむをば。見直し聞き直しまして。平けく安らけく仕へまつらしめますに依りて。大宮賣命と。御名を稱辭竟へまつらくと白す。

六月晦大祓

集侍れる親王諸王諸臣百官の人等。もろく聞しめせと宣る。天皇が朝廷に仕奉る比禮懸くる伴の緒。手懸懸くる伴の緒。鞆負ふ伴の緒。太刀佩く伴の緒。伴の緒の八十伴の緒を始めて。官々に仕奉る人等の過ち犯しけむ種々の罪を。今年の六月の晦の大祓に祓へ給ひ清め給ふ事を。もろく聞しめせと宣る。

高天原に神留ります。皇親神漏岐神漏美の命もちて。八百萬の神等を神集へ集へ給ひ。神議り議り給ひて。我皇御孫命は。豊葦原の瑞穗の國を

安國と平けく知らしめせと。言寄しまつりき。かく寄しまつりし國內に荒ぶる神等をば。神問はしに問はし給ひ。神掃ひに掃ひ給ひて。言問ひし岩根木立。草の片葉をも言止めて。天の磐座放ち。天の八重雲を稜威の道別きに道別きて。天降り寄しまつりき。

かく寄しまつりし四方の國中と。大倭日高見の國を安國と定めまつりて。下津磐根に宮柱ふとしき立て。高天原に千木高知りて。皇御孫命の瑞の御殿つかへまつりて。天の御蔭日の御蔭と隠りまして。安國と平けく知らしめさむ國內に。生り出でむ天の益人等が。過ち犯しけむ種々の罪事は。(中略)こゝだくの罪出でむ。

かく出でば。天津宮事もちて。大中臣天津金木を本打ち切り末打ち断ちて。千座の置座に置き足らはして。天津菅曾を本刈り断ち末刈り切りて。八針に取り裂きて。天津祝詞の太祝詞言を宣れ。

かく宣らば。天津神は天の岩戸を押し開きて。天の八重雲を稜威の道別きに道別きて聞しめさむ。國津神は。高山の末短山の末に上りまして。

高山のいぼり短山のいぼりを掻き分けて聞しめさむ。  
 かく聞しめしてば。皇御孫命の朝廷を始めて天下四方の國には。罪といふ罪はあらじと。科戸の風の天の八重雲を吹き放つ事の如く。朝の御霧夕の御霧を朝風夕風の吹き掃ふ事の如く。大津邊に居る大船を舳解き放ち舳解き放ちて。大海原に押し放つ事の如く。彼方の繁木が本を燒鎌の敏鎌もちて打ち拂ふ事の如く。残る罪はあらじと。祓へ給ひ清め給ふ事を。高山の末短山の末よりさくなだりに落ちたぎつ。早川の瀬にます瀬織津姫といふ神。大海原に持ち出でなむ  
 かく持ち出で往なば。荒沙の沙の八百路の八汐路の沙の八百會にます。速開津姫といふ神。持ちかゞのみてむ。  
 かくかゞのみてば。氣吹戸にます氣吹戸主といふ神。根の國底の國に氣吹き放ちてむ。  
 かく氣吹き放ちてば。根の國底の國にます速佐須良姫といふ神。持ちさすらひ失ひてむ。

かく失ひてば。天皇が朝廷に仕奉る官々の人等を始めて。天下四方には。今日より始めて罪といふ罪はあらじと。高天原に耳振り立て聞く物と馬牽き立て。今年の六月の晦の日の夕日の降の大祓に。祓へ給ひ清め給ふ事を。もろく聞しめせと宣る。  
 四國の卜部ども。大川道に持ち退り出で祓へやれと宣る。

出雲國造神賀詞

八十日は在れども今日の生日の足日に。出雲國造姓名恐みくも申し給はく。  
 掛けまくも畏き明御神と。大八島國しろしめす天皇の手長の大御世と。齋ふとして。出雲の國の青垣山内に。下津岩根に宮柱ふとしき立て。高天原に千木高知ります。伊弉諾の日眞名子。神王熊野の大神。櫛御氣野命。國作りましと大穴持命。二柱の神を始めて。百八十六社にます皇神達を。某が弱肩に太手細取り掛けて。伊都幣の緒結び。天の美賀秘冠りて。伊豆の眞屋に。倉草を伊豆の席と刈り敷きて。嚴蚕黒まし。天の甕

和に齋みこもりて。靜宮に靜め仕奉りて。朝日の豐榮登に。齋の神賀の吉詞奏し給はくと白す。

高天の神王。高御魂神魂命の。皇御孫命に天下大八島國を事避り奉りし時。出雲臣等が遠津祖。天菩日命を國形見に遣はし時。天の八重雲を押し別けて。天翔り國翔りて天下を見廻りて。返事申し給はく。豐葦原の瑞穂の國は。晝は五月蠅なす皆沸き。夜は火瓮なす光る神あり。岩根木立青水泡も言問ひて。荒ぶる國なり。然れども鎮め平けて。皇御孫命に。安國と平けく知ろしめさしめむと申して。己命の御子天夷鳥命に。布都怒志命を副へて天降し遣して。荒ぶる神等を拂ひ平け。國作りましく大神をも媚び鎮めて。大八島國の現事顯事事避らめしき。

すなはち大穴持命の申し給はく。皇御孫命の鎮りまさむ大倭の國と申して。己命の和魂を八咫鏡に取り附けて。倭の大物主櫛瓊玉命と御名を稱へて。大三輪の神奈備に坐せ。己命の御子味耜高彥根命の御魂を。葛城の鴨の神奈備に坐せ。事代主命の御魂を宇奈提に坐せ。賀夜夜流美命の

御魂を飛鳥の神奈備に坐せて。皇御孫命の近き守神と奉り置きて。八百丹杵築宮に鎮りましき。

ここに親神魯枝神魯美命の宣はく。汝天菩日命は。天皇の手長の大御世を。堅石に常石に齋ひまつり。嚴の御世に幸へまつると。仰せ給ひし次のまに。供齋つかへまつりて。朝日の豐榮登に。神の禮代臣の禮自と。御壽の神寶献らくと奏す。

白玉の大御白髪まし。赤玉の御赤らびまし。青玉の瑞の江玉の行合に。明御神と大八島國しろしめす。天皇の手長の大御世を。御佩刀廣らに打ち堅め。白御前の馬足の爪後足の爪踏み立つことは。大宮の内外の御門の柱を。上津石根に踏み堅め。下津石根に踏み凝らし。振り立つる事は耳の彌高に。天下を知ろしめさむ事のしため。白鳥の生御闕の玩物と。靜の大御心もたしに。彼方の古河岸此方の古河岸に。生ひ立てる若水沼間の水の彌若えに御若えまし。すすぎふるをどみの水の。彌をちに御をちまし。まろびの大御鏡を押しはるして見りなはず事の如く。明御神の



大八島國を。天地日月と共に。安らげく平けく知らしめさむ事のしため  
 と。御壽の神寶を捧げ持ちて。神の禮代臣の禮自と。恐みくも天津次  
 の神賀の吉詞白し給はくと奏す。

中臣壽詞

現御神と大八島國しらしめす。大倭根子天皇が御前に。天津神の壽詞を  
 稱辭定めまつらくと申す。  
 高天原に神留ります。皇親神漏岐神漏美の命をもちて。八百萬の神たち  
 を集へ給ひて。皇御孫尊は。高天原に事はじめて。豊葦原の瑞穂の國を。  
 安國と平らげく知らしめして。天津日嗣の天津高御座にまし／＼て。天  
 津御膳の長御膳の遠御膳と。千秋の五百秋に。瑞穂を平けく安らげく。  
 齋庭に知らしめせと。事よさしまつりて。天降しまし／＼のちに。中臣の  
 遠津祖天兒屋根命。皇御孫尊の御前に仕奉りて。天忍雲根神を。天の二  
 上に奉り上げて。神漏岐神漏美命の前に。うけたまはり申しに。皇御孫  
 尊の御膳津水は。現國の水に。天津水を加へて奉らむと申せと。ことを

しへ給ひしによりて。天忍雲根神。天の浮雲に乗りて。天の二上に上り  
 まして。神漏岐神漏美命の前に申せば。天の玉串を事よさしまつりて。  
 此玉串を刺し立てと。夕日より朝日照るに至るまで。天津祝詞の太詔詞  
 言をもて告れ。かく告らば。まちはわかひるに。ゆつ五百箇ねひいでも。  
 りの下より天の八井いでも。こをもちて天津水と聞しめせと。事よさし  
 まつりき。

かくよさしまつりしまに／＼。聞しめす齋庭の瑞穂を。四國の卜部ども。  
 太兆の卜事をもちて仕奉りて。悠紀に近江の國の野洲。主基に丹波の國  
 の氷上を齋ひ定めて。物部の人ども。酒造兒。粉走。灰焼。薪採。相候。  
 稻實公等。大嘗會の齋庭に持ち齋はり參來て。今年の十一月の中つ卯の  
 日に。ゆしりいづしりもち。恐みくも清まはりに仕奉り。月の内に日  
 時を撰び定めて献る。悠紀主基の黒酒白酒の大御酒を。大倭根子天皇が  
 天津御膳の長御膳の遠御膳と。汁にも實にも赤丹の穂にも聞しめして。  
 豊明に明りまして。天津神の壽詞を。稱辭さだめまつる。皇神等も。千

秋五百秋の相嘗に。相うつひまつり。堅磐常磐に齋ひまつりて。いかし御世に榮にしめまつり。某の元年より始めて。天地月日と共に。照らし明らしまさむ事に。本末かたぶけず。茂榊の中とりもちて仕奉る中臣。祭主某。壽詞を稱辭定めまつらくと申す。また申さく。天皇が朝廷に仕奉る親王等。王等。臣等。百官の人等。天の下四方の國の百姓もろく。うごなはりて。見たへ尊みたべ。歎びたへ聞きたべ。天皇が朝廷に。いかし御世に。八桑枝の立ち榮に仕奉るべき祝言を聞しめせと。恐みくも申し給はくと申す。(台記)

神龜六年の詔

神龜六年八月戊辰。詔して正三位藤原夫人を立てて皇后と爲す。壬午五位に及び諸司の長官を内裏に召し入れ。而して知太政官一品舍人親王勅を宣りて曰く。

天皇が大命らまると。親王等また汝王等臣等に語らひ給へと宣はく。天皇朕高御座にいましそめしゆり。今年に至るまで六年になりぬ。この間に

天つ位に嗣ぎますべき次として。皇太子侍りつ。これに由りて其母とい

ます藤原夫人を皇后と定め給ふ。

かく定め給ふは。天皇朕御身も年月積りぬ。天下の君とまして。年の緒ながく皇后いまさむる事も。一つの善からぬわざにあり。また天下の政にたきて。一人知るべき物ならず。必も後の政あるべし。此は事立つにあらず。天に日月あるごと。地に山川あるごと。並びましてあるべしといふ事は。汝等王等臣等あきらけく見知れる事なり。

然るに此位遅く定めつらくは。とひとまにも己が上げ授くる人をば。一日二日と擇び。十日二十日と試み定めしは。こきだしき多き天下の事をや。たやすく行はむと思ほしませて。此六年の内を擇び給ひ試み給ひて。今日いま目のあたり諸を召し給ひて。くはしき事のさま語らひ給ふと。のりたまふ大命を聞しめさへと宣る。

かくのりたまふは。掛けまくも畏き此宮にまして。現御神と大八島國知ろしめし倭根子天皇。わが大君。御母天皇の。始め此皇后を朕に賜へ

る日に勅つらひつらく。女をんなといはど等ひとしみや我われかくいふ。其父ちちと侍まはる大臣おほなみの。天皇すめらみが朝廷みかどをあなうひまつり輔たすけまつりて。いたゞき恐おそみ仕奉つかへりつと。夜中よなか曉あけ時ときと休やすもふ事ことなく。清きよき明あき心こころを持ちてはとひ仕奉つかへるを。見みし給たまへば。其人そのひとのうむがしき事こといろしき事ことを。遂ついにに得え忘れじ。我兒わがこ我王わがみ。過あま無く罪つみ無くあらば。捨すてますな。忘わすれますな。仰おほせ給たまひ宣のたまひし大命おほなみに依よりて。かにかくに年の六年むねを試こみ給たまひ使つかひ給たまひて。此皇后このみくらの位ゐを授たまへ給たまふ。

然しかれども朕時わがときのみにあらず。難波なにわの高津宮たかつかみやに天下あめのみ知しろしめしと大鷲おほしほ鶴つる天皇すめらみ。葛城かつらぎの曾豆そうま比古ひこの女伊波をのいば乃比賣のひめ命のみこと皇后みくらと御みあひまして。天下あめのみの政まつりごと治ちめ給たまひ行ゆひ給たまひけり。今いまめづらかに新あらたしき政まつりごとにはあらず。本もとより行ゆひ來こし跡事あとごとと宣のたま給たまふ大命おほなみを聞きしめさへと宣のたまる。(續日本紀)

### 天平神護三年の詔

冬十月乙未朔詔して曰く。

天皇すめらみが大命おほなみらまと宣のたま給たまはく。

掛けまくも畏かしこき新城あたら城しろの大宮おほのみやに。天下あめのみ治ちめ給たまひし中なつ天皇すめらみの。臣等おほなみを召よして。後のちの大命おほなみに宣のたま給たまひしく。汝等いまを召よしつる事は。朝廷みかどに仕奉つかへらむさま教しんへ給たまはむと召よしつる。穩たゆに侍まはりて諸聞もろきこしめせ。正ただしく明あかに清きよき心こころを持ちて。朕子わがこ大君おほきみに仕奉つかへり護まもり奉まもれ。繼ついでぎては此皇太子このみすひのみこを助たすけ仕奉つかへれ。朕教わがしんへ給たまふ命のみことに従したがはずして。王等おほなみは己おのれが得えまじき帝みかどの尊たごき御位みくらを望のぞみ求もとめ。人ひとをいざなひ悪わるしく穢きたき心こころを持ちて。逆さかにある謀はかりを立て。臣等おほなみは己おのれがひきく。是こゝにつき彼かによりつと。頗かたに禮れい無むき心こころを思おもひて。横よこしまの謀はかりを搆たがへ。かくあらむ人等ひとらをば。朕わがかならず天翔あまがり給たまひて見みるなはし。退しりぞけ給たまひ捨すて給たまひ嫌きらひ給たまはむものぞ。天地あめとちの幸さいも蒙あまらじ。かくのさま知しりて。明あかに清きよき心こころを持ちて仕奉つかへらむ人ひとをば。惠あはれ給たまひ慰なぐさみ給たまひて治ちめ給たまはむものぞ。また天あめの幸さいも蒙あまり。永とこき世よに門絶かたえず仕奉つかへり榮さかえむ。こゝ知りて謹こましまり。清きよき心こころを持ちて仕奉つかへれと。宣のたま給たまはむとなも召よしつる。のりたまひ仰おほせ給たまふ大命おほなみを。もろく聞きしめさへと宣のたまる。また宣のたま給たまはく。掛けまくも畏かしこき朕天わがあめの帝みかど天皇すめらみが大命おほなみもちて。のりたまひ

しく。朕に仕奉らむ諸の臣等。朕を君と思はむ人は。皇后によく仕奉れ。朕を思ひてあるが如く。異にな思ひ。繼ぎては。朕子皇太子に。明かに清く二心なくして仕奉れ。朕は子二人といふことは無し。唯皇太子一人のみが朕子はある。この心知りて。もろく護り助け仕奉れ。さて朕は御身つからしく大ましますに依りて。皇太子に天津日嗣高御座の次は授けまつると。のりたまひて。朕に宣給ひしく。

天下の政は慈を持ちて治めよ。また上は三寶の御法を榮らしめ。家出せる人を治めまつり。次は諸の天神地祇の祭を断たず。下は天下のもろもろの人民を慰み給へ。

また宣給ひしく。此帝の位といふものは。天の授け給はぬ人に授けては。保つことも得ず。又かへりて身も滅びぬるものぞ。朕が立てゝある人といふとも。汝が心に善からずと知り。目に見ても人をば。變へて立てむことは。心のまにませよと宣給ひき。

また宣給ひしく。朕が東人に太刀を授けて侍はしむる事は。汝の近き護

として護らしめよと思ひてなもある。此東人は常に曰く。額には矢は立つとも。背は矢は立たじといひて。君を一つ心を持ちて護るものぞ。此心知りて汝仕へと。のりたまひし大命を忘れず。此さま悟りて。もろもろの東國の人等。謹しまり仕奉れ。さて掛けまくも畏き二所の天皇が大命を。朕が頂に受けたまはりて。晝も夜も思ほし持ちてあれども。由なくして人に言ひ聞かむ事得ず猶ありき。これによりて。もろくの人に聞かむとも召しつる。かれこゝをもて。今朕が汝等を教へ給はむ大命を。もろく聞しめさへと宣給ふ。

夫れ君の位は。願ひ求むるを以ちて得る事はいと難しといふ事をば。皆知りてあれども。先の人は謀をぢなし。我はよくつよく謀りて。必ず得てむと思ひて。くさぐさに願ひ請れども。なほ諸聖天神地祇の御靈の。許したまはず。授けたまはぬ物にあれば。れのつからに人も申し顯し。己が口を以ちても言ひつゝ。かへりて身を滅ぼし災を蒙りて。終に罪を己も人も同じく致しつ。これによりて天地を恨み。君臣をも恨みぬ。な

ほ心を改めて直く清くあらば。天地も憎み給はず君も捨て給はずして。福を蒙り身も安けむ。生きては官位を賜はり榮む。死にては善き名を遠き世に流し傳へてむ。

この故に。先の賢き人といひて在らく。身は灰と共に地に埋もりぬれど。名は烟と共に天に昇るといへり。又曰く。過を知りては必ず改めよ。善きを得ては忘るなといふ。然る物を。口に我は清しといひて心に穢きをば。天の覆はず地の載せぬものとなりぬ。此をたもつには譽を致し。捨つるには謗を招きつ。なほ朕が尊び拜み讀誦しまつる。最勝王經の王法正論品に宣給はく。若造善惡業。今於現在中。諸天共護持。示其善惡報。國人造惡業。王者不禁制。此非順正理。治擯當如法。と宣給ひてあり。ここをもて汝等を教へ導く。今の世には世間の榮福を蒙り。忠しく清き名を顯し。後の世には人天の勝樂を受けて。終に佛となれと思はしてなも。もろく〜に此事を教へ給ふと。のりたまふ大命を。もろく〜聞しめさへと宣る。

又宣給はく。此賜ふ帶を賜はりて。汝等の心を調へ直し。朕が教言に違はずして。束ね治めむ表となも。此帶を賜ふ大命を。もろく〜聞しめさへと宣る。(續日本紀)

### 左大臣藤原永手に賜ひし詔

寶龜二年二月己酉左大臣正一位藤原朝臣永手薨す云々。詔して正三中納言兼中務卿文室真人大市正二位員外中納言兼宮内卿右京大夫石川朝臣豐成を遣して之を弔賜せしめ給はく。

藤原の左大臣に宣給ふ大命を宣る。

大命にませ宣給はく。大臣明日は參出來仕へむと待たひ給ふ間に。やすまりて參出きます事はなくして。天皇が朝廷を置きて退りいますと。聞しめして思ほさく。ねよづれかも戲言をかも言ふ。誠にあらば。仕奉りし太政官の政をば。誰に託しかも退りいます。誰に授けかも退りいます。恨めしかも悲しかも。朕が大臣。誰にかも朕が語らひ放けむ。誰にかも朕が問ひ放けむ。悔しき惜しき痛み悲しみ。大御音泣かしますと。

のりたまふ大命を宣る。

悔しかも惜しかも。今日よりは大臣の申しと政は。聞しめさずやならむ。明日よりは大臣の仕奉りし姿は。見うなはさざやならむ。日月かさなりゆくまに。悲しき事のみしいよと起るべきかも。年時つもりゆくよに。さぶしき事のみしいよと増さるべきかも。

朕が大臣。春秋の麗はしき色をば。誰と共にかも見うなはし弄び給はむ。山川の清き所をば。誰と共にかも見そなはし明らへ給はむと。歎き給ひ愛へ給ひ大ましますと。のりたまふ大命を宣る。

汝大臣の。萬の政ふさねもちて。怠りたゆむ事なく。曲げ傾くる事なく。王等臣等をも彼此別く心なく。普く平らけく奏さひ。公民の上をも。廣く厚く恵みて奏さひし事。此のみにあらず。天皇が朝廷を。暫の間も退り出でし休もふ事なく。食國の政の善くあるべきさま。天下の公民の息まるべき事を。朝夕夜晝といはず。思ひ議り奏さひ仕奉れば。いりしみ明らけみ穩ひし頼もしみ思ほしつ。大まします間に。忽に朕が朝廷

を離りて退りましぬれば。言はむすべもなく爲むすべも知らに。悔しび給ひわび給ひ大ましますと。のりたまふ大命を宣る。

又こそわきて宣給はく。仕奉りしこと廣み厚み。汝大臣の家の内の子等をも。はふり給はず失ひ給はず。恵み給はむ起し給はむ。尋ね給はむ願み給はむ。汝大臣の罷道も後輕く。心もただひに思ひて。平けく幸く罷り通らすべしと。のりたまふ大命を宣る。(續日本紀)

### 大國主神のくだり

ここに天照大御神の宣給はく。又いづれの神を遣してばえけむ。かれ思金神また諸の神等まをしけらく。天の安河の河上の天の岩屋にます。名は伊都之尾羽張神これ遣すべし。若し又この神ならずは。りの神の子建御雷之男神。これ遣すべし。まづ其天尾羽張神は。天の安河の水を逆さまにせきあげて。道をせきをれば。他神は得ゆかじ。かれ殊に天迦久神を遣して問ふべしと申しき。

かれここに。天迦久神を遣して天尾羽張神に問ふ時に。かしこし仕奉ら

も。然れども此道には。吾子建御雷神を遣すべしと申して。すなはち奉りき。かれ天鳥船神を。建御雷神に副へて遣しき。こゝをもて此二柱の神。出雲の國の伊那佐の小濱に降り着きて。十掬劔を抜きて。波の穂に逆さまに刺し立て。うの劍の先にあぐみぬて。その大國主神に問ひ給はく。天照大御神高木神の命もちて。問ひにつかはせり。汝がうしはける葦原の中つ國は。我御子の知らさむ國と。こゝよさし給へり。かれ汝が心いかにぞと問ひ給ふ時に。答へまつらく。吾は得まをさじ。吾子八重事代主神これ申すべきを。鳥の遊び漁しに御穂の崎に行きて。いまだ歸りこずと申しき。かれこゝに天鳥船神を遣して。八重事代主神を召して問ひ給ふ時に。その父の大神に。かしこし此國は天つ神の御子に奉り給へといひて。即ち其船を踏み傾けて。天の逆手を青柴垣に打ちなして隠りましき。かれこゝに其大國主神に問ひ給はく。今汝が子事代主神かく申しぬ。又申すべき子ありやと問ひ給ひき。こゝに又まをまつらく。又吾子建御名

方神あり。これをねきては無し。かく申し給ふ折しも。うの御名方神。千引岩を手末に捧げて來て。誰が我國に來て忍びく此く物言ふ。然らば力くらべせむ。かれ我まつ其御手を取らむといふ。かれ其御手を取らしむれば。即ち立氷に取りなし。また劍刃に取りなしつ。かれ恐れて退き居り。こゝに其建御名方神の手を取らむと。乞ひかへして取れば。若葦を取るがごと。つかみひしぎて投げ放ち給へば。即ち逃げいにき。かれ追ひ行きて。科野の國の諏訪の海にせめいたりて。殺さむとし給ふ時に。建御名方神まをまつらく。かしこし我をな殺し給ひそ。この處をねきては。あだしところに行かじ。また吾父大國主神の命に違はじ。八重事代主神の言に違はじ。この葦原の中つ國は。天つ神の御子の命のまにく。たてまつらむと申し給ひき。かれ更に又かへりきて。その大國主神に問ひ給はく。汝が子等。事代主神建御名方神ふたりは。天つ神の御子の命のまにく。違はじと申しぬ。

かれ汝が心いかにぞと問ひ給ひき。こゝに答へまつらく。吾子ふたりの申せるまにく。吾も違はじ。この葦原の中つ國は。命のまにく。既に献らむ。たゞ吾住所は。天つ神の御子の天津日嗣しろしめさむ。とだる天の御巢なして。底津石根に宮柱ふとしり。高天原に氷木高知りて治め給はゞ。吾は百足らず八十隈手に隠りて侍ひなむ。又吾子等百八十神は。八重事代主神。神の御尾前となりて仕奉らば。違ふ神はあらじ。かく申して。出雲の國の多藝志の小濱に。天の御殿を作りて。水戸の神の孫。櫛八玉神を膳夫として。天の御饗たてまつる時に。禰を申して櫛八玉神鶉になりて。海の底に入りて底の埴を食ひ出で。天の八十平釜を作りて。海布の柄を刈りて燈白に作り。菰の柄を燈杵に作りて。火を切り出で。申しけらく。この我切れる火は。高天原は。神産日御祖命の。とだる天の新巢の煤の。八束垂るまで焼きあげ。地の下は。底津石根に焼き凝らして。烤繩の千尋繩うちへ。釣らせる海人が大口の尾鰭鱈。さわく。に引き依せ上げて。拆竹のこをこをこに。天の眞魚昨たてまつら

むと申しき。

かれ建御雷神かへりまぬのぼりて。葦原の中つ國ことむけやはしぬる様を申したまひき。(古事記)

### 磐鹿六雁命

掛けまくも畏き。卷向の日代宮に天下しろしめし。大足彦忍代別天皇五十二年癸亥八月。まへつぎみたちに宣給はく。朕うつくしき御子を思ふこといつかも止みなむ。小碓王のむけたまひし國々を巡らむと思ふとのりたまひき。

此月伊勢にいでまし。うつりて東の國に入りましき。

冬十月上總の國安房の浮島宮に到りましき。その時磐鹿六雁命みともつかへき。天皇葛飾野にいでまして。御獵せしめ給ひき。大后八坂媛は假宮にまし。磐鹿六雁命も留まり侍ひき。

此時磐鹿六雁命に宣給はく。此浦に怪しき鳥の聲聞ゆ。うれかぐくと鳴けり。うの形を見まくほりすと宣ふ。すなはち磐鹿六雁命。船に乗り



て鳥の許に到れば。鳥驚きて異浦に飛びき。なほ追ひ行けども遂に得捕らず。こゝに磐鹿六雁命誼ひけらく。汝鳥よ。其聲を慕ひて貌を見まほりするに。異浦に飛び遷りて其形を見しめず。今より後陸に得あがらざれ。若し大地の下に居らば必ず死なむ。海中をもて住處とせよ。還る時鱸をかへりみれば。魚多く追ひ來。すなはち磐鹿六雁命。角罫の弓もて。浮べる魚の中に當てしかば。すなはち頸に著きて出で。忽ち數多得つ。かれ名づけて頑魚といふ。これ今の鱈に堅魚といふ。船潮の涸るゝに遇ひて洲の上に居ぬ。堀り出でむとするに。八尺の白蛤一つを得つ。磐鹿六雁命の二種の物を捧げて。大后に献りき。すなはち大后譽め給ひ悦び給ひて宣給はく。いとうまく清く作りて御食つかへまつらむと欲りすと宣給ひき。その時磐鹿六雁命まをさく。六雁が作らせて献らむと申して。武藏の國造が遠つ祖大多毛比。秩父の國造が遠つ祖天上腹天下腹人等を。喚ばしめて脰に作り又煮焼し種々作り盛りて。河曲山の槍の葉を見て。高次八

つに差し作り。真木の葉を見て。平次八つに差し作りて。日蔭を取りて鬘とし。蒲の葉をもて鬘を巻き。真柄の葛を取りて手繩に掛け帯にし。足結を結びて。くさぐさの物を結び飾りて。天皇御獵より還り入ります時に仕奉らむとす。此時のりたまはく。誰しが作りて献れる物ぞと問ひ給ふ。うの時大后奏し給はく。此は磐鹿六雁命の献れるものなりと。奏し給ひしかば。すなはち歡び給ひ譽め給ひて宣給はく。此は磐鹿六雁命ひとりの心にはあらず。此は天にます神の行ひ給へるものなり。大倭の國は。行ふわざをもて名に負する國なり。磐鹿六雁命は。朕が御子等に。あれみこの八十歳に。遠く長く。天皇が天つ御食を。齋ひ忌はり取り持ちて仕奉れと。ねほせたまひて。すなはち若湯坐連等が本つ祖。物部意富賣布連の。佩きたる太刀を解き置かせて。副へたまひき。また此れこなふわざは。大伴立ちならびて仕奉るべきものとあれと。のりたまひて。日の豎日の横。陰面背面の國々の人を分ち移して。大伴部

と名づけて。磐鹿六雁命に賜ひき。また諸の氏人。東の方の國々の造十  
 二氏の林子。れのく一人づゝ獻らしめて。平次比例たまひて依し給ひ  
 き。山野海河の物は。たにぐくのさわたるきはみ。かへらのかよふきは  
 み。鱈の廣物鱈の狭物。毛の荒物毛の和物。くさぐさの物等を供へ。ふ  
 さね取り持ちて仕奉れど。依し給ひき  
 かく依し給ふ事は。朕が一人の心にあらず。こは天にます神の命ぞ。朕  
 が御子磐鹿六雁命。諸友諸人等を催し率ゐて。慎み勤しみ仕奉れど。仰  
 せ給ひ誓ひ給ひて依し給ひき。

此時。上總の國の安房の大神を。御食津神とませまつりて。若湯坐連等  
 が本つ祖。意保賣布連が子。豊日連をして火を切らしめて。此を忌火と  
 して。齋ひ忌へて御食たてまつり。また大八洲にかたどりて。八男八少  
 女と定めて。神嘗大嘗等に仕奉り初め給ひき。

(申略)

六雁命。七十二年の秋八月病を受けて。同じ月に神去りましき。時に天

皇きこしめして。いたく悲しみ給ひて。親王の式に准へて葬を賜ひき。  
 こゝに宣命使に。藤河別命武男心命等を遣して。命を宣り給はく。天皇  
 が大御言らまど宣り給はく。御子六雁命思ほさる外に神去りたりと聞  
 じめし。夜盡に悲しみ愛へ給ひつゝ大まします。

天皇の御代の間は。平にして相見うなはさむと思ほす間に。別れゆけり。  
 然れば今れもほしめす所は。十一月の新嘗の祭も。膳職の御膳の事も。  
 六雁命の勞き始めなせる所なり。こゝをもて六雁命の御魂を。膳職に齋  
 ひまつりて。春秋の永き世の神寶と仕奉らしめ。子孫等をば。永き世の  
 膳職の長とも。上總國の長とも定めて。外の氏は任せ給はで治め給はむ。  
 もし膳臣等の織ぎ在らざらむには。朕が御子等をして。外の氏の人等を  
 相交へては亂らしめじ。若狭の國は。六雁命に。永く子孫等が遠き世の  
 國家と爲せど。定めて授け給ひてき。

此事は世々にも過まり違はじ。此志を知りたびて。よく膳職の内も外も  
 護りたびて。宮の患の事ども無く。あらしめ給ひたべとなも思ほし

めすと。のりたまふ天皇の大御言らまを空つ御魂も聞きたへと申すと宣り給ふ。(高橋氏文)

意宇郡

意宇と名づくる所以は。國引きませる八束水臣津野命の宣給はく。八雲立つ出雲の國は。狭布の稚國なるかも。初國小く作れり。かれ作り縫はもと宣給ひて。栲衾新羅の三崎を。國の餘々ありやと見れば。國の餘ありと宣給ひて。少女の胸鉏取らして。大魚のきだつきわけて。旗薄ほふりわけて。三つよりの綱うちかけて。霜黒葛くるやくに。河船のもうろくに。國來々々を引きて來て縫へる國は。去豆より打ち絶ちて。八穗米杵築の御崎なり。かくて堅め立てし戕は。石見の國と出雲の國の堺なる。名は佐比賣山これなり。また持ち引ける綱は。齒の長濱これなり。また北門佐伎の國を。國の餘々ありやと見れば。國の餘ありと宣給ひて。少女の胸鉏取らして。大魚のきだつきわけて。旗薄ほふりわけて。三つよりの綱うちかけて。霜黒葛くるやくに。河船のもうろくに。國來

々々を引きて來て縫へる國は。多久より打ち絶ちて。狭田の國これなり。また北門良波の國を。國の餘々ありやと見れば。國の餘ありと宣給ひて。少女の胸鉏取らして。大魚のきだつきわけて。旗薄ほふりわけて。三つよりの綱うちかけて。霜黒葛くるやくに。河船のもうろくに。國來々々を引きて來て縫へる國は。手染より打ち絶ちて。間見の國これなり。また高志の都々の三崎を。國の餘々ありやと見れば。國の餘ありと宣給ひて。少女の胸鉏取らして。大魚のきだつきわけて。旗薄ほふりわけて。三つよりの綱うちかけて。霜黒葛くるやくに。河船のもうろくに。國來々々を引きて來て縫へる國は。三穗の崎なり。持ち引ける綱は。夜見島これなり。堅め立てし戕は。伯耆の國なる大神岳これなり。今は國引き訖へぬと宣給ひて。意宇の杜に御杖つきたて。ねると宣給ひき。かれ意宇といふ。(出雲風土記)

高千穂二上峰

白杵の郡の内知鋪郷は。天津彦火瓊杵尊。天の磐座はなれ。天の八重

雲を押し分け。稜威の道別き道別きて。日向の高千穂の二上の峰に天降りましう時に。空くらくて夜晝わかず。人ども道に迷ひ物の色わきがたし。

こゝに土蜘蛛あり。名を大鉗小鉗といふ。二人皇御孫尊に奏しけらく。尊の御手もちて。稻千穂を抜きて。糶となして四方に投げ散らし給は。必ず晴れ明りなむと奏しき。

時に大鉗等が奏せる如く。千穂の稻を抜きて。糶となして投げ散らし給ひしかば。即ち空晴れあかりて日月照りかやけり。かれ高千穂の二上の峰といふ。後の人改めて智鋪といふ。(日向風土記)

筑波神

昔御親の尊。もろくの神の處に巡りいでます時。駿河の國福慈の岳に到りまして。遂に日暮れにしかば。宿を請ひ給ひき。

此時福慈の神答へ給はく。新嘗して屋内物忌せれば。今日の間は得貸し奉らじと宣ふ。こゝに御親の尊恨み泣きて罵り給はく。すなはち汝が親

をなぐも宿かさざる。汝が居る山は。世の極み夏冬雪霜ふりて。寒くこゝえて人々のぼらし。食物も奉るもの無けむとのたまひて。更に筑波の岳に登りまして。宿を請ひ給へば。此時筑波の神答へ給はく。今宵新嘗せれども。いかで大命を背きまつらむと宣ひて。こゝに御僕つものを設けて。畏み仕へまつらしき。

こゝに御親の尊歡び歌ひ給はく。うつくしきかも吾御子。高きかも神つ宮。天地のむた。日月と共に。人民まねつどひ。食物ゆたかに。代々に絶ゆる事なく。日にけに彌榮わて。千年萬代たぬしみ盡せじとのりたまひき。

こゝをもて。福慈の岳は常に雪ふりて人のぼりわす。其筑波の岳は。行きつどひ歌ひ舞ひ飲食して。今に至るまで絶わす。(常陸風土記)

二八四 日本大文學史卷の一 第二編 上古の文學 散文の作例 (二八四)

日本大文學史卷の一終

大和田建樹著

日本大文學史 卷之二

東京 博文館藏版

# 日本大文學史卷の二目次

## 第三編 中古の文學

### 第四期 延喜天曆

#### 第二十二章 概説

第四期の區域——山城筑都——勸學田——天台眞言の二宗——  
貴族子弟の就學——醫術の書——嵯峨の朝——仁明清和の  
朝——延喜天曆——平安京の地形——女性的文學——佛法の  
弘通——漢學の勢力——短歌の孤立——佛法と漢學との功罪  
——國文大に興る

#### 第二十三章 言語の變遷

發音の變動——川語の變動——漢語佛語の混和——音便の現  
出

#### 第二十四章 漢學の勢力

漢文の名作——詩の名作——四六文體——對句の構造——詩  
文の和習——白氏文集——私學校起る——漢文の著作——詩  
文の名家——國史の編纂——乎古止點

第二十五章 假名の發明 ..... 一九

平假名——弘法大師——片假名——吉備真備

第二十六章 長歌の頓挫 ..... 二三

和歌衰頹の敵——興福寺僧の作——古今集時代の作——萬葉  
集との比較——句格の變遷——五七體——七五體

第二十七章 當期の歌謠 ..... 二八

誦歌との分離——儀式的の歌謠——神樂歌——催馬樂——之  
に屬せる樂器——其句格——其用語——其章段——風俗歌——  
今樣歌——和歌の起原

第二十八章 短歌の興隆 ..... 三八

六歌仙——宇多醍醐の兩帝——古今和歌集——村上天皇——  
後撰和歌集——新撰和歌集——古今和歌六帖——家集——歌  
合——物の名——折句——沓冠——日本紀覽宴の歌

第二十九章 散文の勃興 ..... 四八

前代の殘物——貫之の慷慨——歌集の詞書——歌集の序——  
試作の時代——土佐日記——蜻蛉日記——竹取物語——伊勢  
物語——空穗物語——大和物語——落窪物語

第三十章 著名の作者 ..... 五四

- 齋部廣成 ..... 五四
- 小野小町 ..... 五四
- 在原業平 ..... 五六
- 藤原敏行 ..... 五七
- 僧正遍昭 ..... 五七
- 在原行平 ..... 五九
- 素性法師 ..... 六一
- 文屋康秀 ..... 六二
- 大江千里 ..... 六二

菅原道真	六三
紀友則	六六
伊勢	六六
中務	六八
藤原兼輔	六九
梶垣姫	七〇
源宗子	七〇
大友黒主	七〇
凡河内躬恒	七〇
坂上是則	七一
紀貫之	七一
清原深養父	七三
壬生忠岑	七三
藤原信明	七四

齋宮女御	七四
藤原道綱の母	七五
源順	七五
清原元輔	七六
平兼盛	七六
壬生忠見	七七
大中臣能宣	七七
曾禰好忠	七八
藤原實方	七八
源重之	七九

**第三十一章 散文の作例**

龍の首の玉(作者しらず)	八〇
都鳥(作者しらず)	八六
小野の雪(作者しらず)	八八



家の集の内(伊勢).....	九〇
家の集の内(檜垣姫).....	九五
大井川行幸和歌の序(紀貫之).....	九六
古今和歌集の序(同じ人).....	九七
紀行の内(同じ人).....	一〇四
月日の數(作者しらす).....	一一〇
蘆賣る男(作者しらす).....	一一六
落窪の君(作者しらす).....	一二二
初瀬詣(藤原道綱の母).....	一二五
<b>第三十二章 韻文の作例</b> .....	
其一 短歌および旋頭歌.....	一三二
古今和歌集六十六首.....	一三二
後撰和歌集十八首.....	一四八
其二 長歌.....	

續日本後紀一首.....	一五三
古今和歌集三首.....	一五九
蜻蛉日記一首.....	一六四
神樂歌四首.....	一六七
催馬樂五首.....	一六九
<b>第五期 源氏物語時代</b> .....	
<b>第三十三章 概説</b> .....	一七二
第五期の區域——定子中宮——上東門院——才女の輩出—— 藤氏の榮花——泰平後の戦亂	
<b>第三十四章 散文の盛運</b> .....	一七八
源氏物語——狭衣——住吉物語——とりかへばや物語——濱 松中納言物語——其他の古物語——唐物語——今昔物語—— 宇治拾遺——日記紀行の文——和泉式部日記——紫式部日記 ——更科日記——讃岐典侍日記——枕草子——消息文	
<b>第三十五章 和文體の歴史</b> .....	一九二

物語體歴史の作——大鏡——榮花物語——續世繼——水鏡

第三十六章 和歌の狀態

一九五

拾遺和歌集——後拾遺和歌集——金葉和歌集——詞花和歌集  
——千載和歌集——私撰歌集——歌合——歌學——題詠  
——連歌——落首——今様歌——漢詩思想——佛教思想

第三十七章 著名 of 作者

- 藤原公任 ..... 二〇四
- 和泉式部 ..... 二〇四
- 紫式部 ..... 二〇五
- 赤染衛門 ..... 二〇七
- 伊勢大輔 ..... 二〇八
- 清少納言 ..... 二〇九
- 大貳三位 ..... 二一〇
- 能因法師 ..... 二一一

相摸	二一三
菅原孝標の女	二一四
源隆國	二一四
讃岐典侍	二一四
源經信	二一四
藤原顯季	二一五
源俊賴	二一六
藤原基俊	二一八
藤原爲業	二一九
藤原顯輔	二二〇
堀川	二二〇
藤原清輔	二二一
源賴政	二二一
平忠度	二二二

中山忠親

第三十八章 散文の作例

小柴垣(紫式部)	二二三
時雨るゝ空(同じ人)	二二三
親のいさめ(同じ人)	二二七
女郎花(同じ人)	二二九
雪の山(清少納言)	二三一
今まわりの頃(同じ人)	二三四
龜山の麓(大貳三位)	二四〇
嵯峨野(作者しらず)	二四六
琴の聲(作者しらず)	二五〇
若君姫君(作者しらず)	二五二
物まうで(菅原孝標の女)	二五四
百濟の川成飛彈の工(源隆國)	二五七
	二六一

御堂供養(作者しらず)	二六四
日記の内(讃岐典侍)	二七一
琵琶の聲(作者しらず)	二七三
太政大臣良房(作者しらず)	二七六
鄙の別(作者しらず)	二七七

第三十九章 韻文の作例

其一 短歌および旋頭歌	二八一
拾遺和歌集十首	二八一
後拾遺和歌集八首	二八三
金葉和歌集六首	二八五
詞花和歌集六首	二八七
千載和歌集十二首	二八九
其二 長歌	
千載和歌集三首	二九二

其三 今様歌

五節間野曲一首……………二九七

源平盛衰記四首……………二九七

義經記一首……………二九八

吾妻鏡一首……………二九九

日本大文學史卷の二目次終

日本大文學史卷の二

大和田建樹著

第三編 中古の文學

第四期 延喜天曆

第二十二章 概説

第四期の區域——山城筑都——勸學田——天台眞言の二宗——貴族子弟の就學——醫術の書——嵯峨の朝——仁明清和の兩朝——延喜天曆——平安京の地形——女性的文學——佛法の弘通——漢學の勢力——短歌の孤立——佛法と漢學との功罪——國文大に興る

第四期の區域

桓武天皇の都を山城に奠め給ひしに起りて。一條天皇の頃までを第四期とす。すなはち漢學の隆盛なるに壓倒せられて一たび眠りたる國文學が。呼び覺まされて大成の功を奏するまでの時代なり。

山城奠都

勸學田

天台眞言の二宗  
貴族子弟の就學

醫術の書

嵯峨の朝

仁明天皇の兩朝

山城奠都の事ありしは天皇の延暦十三年なりき。翌年詔して宣はく。古の王者は教學を先とせり。今大學寮の生徒や多くして。供給に乏し。宜しく越前の水田一百二町を加ふべしと。之を勸學田と名づけ給へり。叡慮を學事に專にせさせ給ひし厚きを知るべし。最澄空海の二僧。入唐して佛教を學びしも此御代にあり。二僧後歸朝して。天台眞言の二宗大に我國に開けたり。平城天皇は諸王以下の子弟に勅して。十歳已上に至れば。皆大學に入り業を分ちて教習せしめ給へり。

三年安倍眞直出雲廣貞等。醫術の書一百卷を撰びて奉れり。名づけて大同類聚方といふ。以て斯道の大に開けたるを知るべし。

嵯峨天皇の御宇には。蝦夷征討の事あり。弘仁格式の撰定あり。淳和天皇の御宇には。大學寮の學士をして紫宸殿に時事を討論せしめ。また諸氏の子孫を大學に入らしめ。試に應じて及第せしものは。官を授くるの制を創め給へり。

仁明天皇は。菅原清公をして後漢書を侍講せしめ。清和天皇は。春日雄繼を

延喜天曆

して孝經を侍讀せしめ。天皇の御讀書は必ず孝經より始まるの恒例を。作らせ給へり。貞觀格式の成りたるも。清和の御時をりき。

第四期の内に最も盛なりし御代を醍醐村上二帝とす。謂はゆる延喜天曆の治とは是なり。先づ延喜には。延喜格式の成れるあり。勅問に應じて三善清行の異見封事を奉れるあり。天皇御みづから學生を試み給へる事あり。天曆には。大江朝綱菅原時文等の諸博士をして。古今の詩を選ばしめ。小野道風に命じて之を禁中の御屏風に書せしめ。巨勢金岡の玄孫公忠をして。うの像を畫がせ給ひし事あり。菅原文時封事を奉りて。奢侈を禁ぜんと請ひし事あり。天皇柏梁殿にねはして。文臣四十人を召し。詩を獻せしめて御みづから試み給ひし事あり。實に此兩朝は聖代として仰がれ。治世として知らるゝと共に。文學の隆盛を極めし事。つぎの章に説くを見て知るべし。

なほ此間に天慶の亂あり。後に花山天皇の御出家あり。藤原氏の專横を朝廷に恣にする時勢に至りしをも思ふべきなり。以上は當期に起りたる出來事にして。文學に關係あるものゝ概略のみ。なほ

其結果たる文學の變遷に至りては。更に一言せざるべからず。

讀者は印度の文學を見ずや。印度の獅子吼え毒蛇横たはるの深山曠野は。恐懼すべき惡魔魍魎の鬼神を想像せしめしを。讀者は希臘の文學を見ずや。希臘の山笑ひ水歌ふの春色秋景は。敬慕すべき美の神。音樂の神の信仰を發せしめしを。身を取り圍める外界の事物が。住民の内心を支配するの結果は。此くの如く著るしきものあるなり。此理を知らば。我文學の。上古の岸を離れて中古の汀に着せしも。又あのづから明かならん。

上古は概して言へば。大和の都の時代なり。さて其大和の地形は如何。南には吉野山深くして。吉野川の麓を流るゝあり。西には葛城立田生駒の山々。白雲の間に聳ゆるあり。東には奈良市街に臨み月を戴く三笠山あれば。北には出で入る旅人を親しく迎ふる奈良山あり。佐保川あり。國の平原を望めば。鼎足の如くに藤原の地を中にしつゝ待ち立てる。畝傍耳無香山の三山あり。これら天然の地形が。深遠なる歌人の情致を養ひ成したるは。疑ふべからざる事實なりとす。よしや海無し國にて。其都の規模は小なりしにもせよ。吉

野川を下れば紀伊の海にも遊ぶべく。山一つ越えて難波に近江に往來せし旅人の吟詠は。少なからざりしをや。

平安京の地形

然れども政治上には不便の地なりとて。都を山城に遷されしは。前にも言へるが如し。是が中古の推し遷りたる一大原因にはある。讀者平安京の地圖を披き見よ。三方青山に圍まれて中央に市區あり。鴨河は其東を流れて堤の柳烟の如く。大井川は其西に走りて影うつす花雲の如し。春の朝。秋の夕。いつとしてか優美婉麗の感情を誘起せざるべき。是が遠大雄壯の氣を去つて。優美婉麗の一方に長所を向けしめたる一大原因なりける。

女性的文學

佛法の弘通

感情思想すでに優美婉麗の一方に傾けり。之に伴ふ言語も又然らざるを得ず。况や平安京の言語は。壯大快活の方に向かずして。此優美婉麗の點を助けんとのみ。得意の腕を撫で居るをや。加茂真淵は評して。大和京の文學を男性とし。山城京のを女性とせしも。故あるかな。然れども是は單に天然との關係のみ。更に人事の發達は如何。佛法は上古の時に。三論。成實。法相。俱舍。華嚴。律。等の諸宗開けしといへども。概

して言へば。渡來のまゝに傳はりたるのみにて。未だ日本化せざるものなりしが。今や天台眞言の如き。今日まで行はるゝ宗旨も起り。佛法は全く我國普通の宗教となりて。誰も忌み嫌ふものなく。皇族貴族は争ひて寺を建立し。みづからも出家して冥福を祈り。老若男女我劣らじと經を書き。佛事供養して餘念なき有様なり。如何でか此隨喜渴仰の思想が。文學を支配せずして止みぬべき。

漢學の勢力

次に漢學の勢力は如何。男子普通の學問となりて。之を學ぶ官私の學校も起り。官吏の登用も之によりて執行せらるゝに至りしかば。我國語もて歌よみ文つくる事は。専ら婦女子の業とて賤しまれ。漢文を稱して男文字といひ。假名文を稱して女文字と呼ぶるゝに至りしは。いかにあさましかりし世の中ならずや。

短歌の孤立

かゝるあさましき世の露の命を。僧侶れよび婦女子者間の掌中に委ね。短歌の力にて維持せしめしこと。ほとんど百年。此時に當り。我文學の方向を誘導しつゝある佛法と漢學と。りの優劣如何といふに。漢學は言文の間を離隔

佛法と漢學との距離

し。佛法は之を近接せしめんとするの差あり。離隔すとは何ぞ。當時人間の言語思想を標準として文を作るに非ず。迂遠なる漢文の用字格法を標準として文を作るが故に。言ひたき事も言ひやうを知らねば書く能はず。我心に無き事も。模型の示す所に引かれては飾り言ふ有様にて。文は全く虚飾偽物の摸造品と爲り畢んぬ。されば言語は言語として對話の間に行はれ。漢文は漢文として學者の中に行はるゝが故に。其間に化し化せらるゝ親睦なく。迂はますゝ迂になりて實用に疎くなりはてたり。是が後世まで毒を殘したる一大障害物なりける。佛法の之を近接せしむるとは何ぞ。最澄空海の説くところを見よ。古來の神道を佛法に混合して。世俗人情の向ふところに違背せず。其歸依信仰の因る所を察し。以て其宗旨を日本國中に弘めしならずや。言語思想に對するも又然り。假名文字の紹介といひ。今様歌の創作といひ。短歌の維持といひ。もとより佛法布教の目的に出でしとはいへども。我文學のためには。大に謝せざるべからざるなり。

國文大に興る

物縮まれば必ず伸ぶ。我國の歌と文とは女々しきものと呼ばれて。有りがひもなく生活せしこと。こゝに百年。この壓迫の甚しきを受けたるもの。いかで福運開發の彈力を生ぜずして止むべきぞ。

紀貫之一たび出でより。奈良朝以後一大盛舉の勅撰歌集も成り。命脈系筋の如くなりつる和文の衰運も挽回せられ。世は又たほろしき雲霧の内のみ沈みはてずして。晴れわたりゆく空の月日を。仰ぐ事とはなりにけり。延喜聖代の文學。あに特筆大書すべきにあらずや。

前すでに此盛事あり。續いて村上天皇の勅撰を後に辱するに逢ふ。天曆聖代の文學。あに又特筆大書すべきにあらずや。さるにても勅位もし既往に遡りて文學の功者に與へられ得べくんば。第一等に叙すべきは貫之なりかし。

### 第二十三章 言語の變遷

發音の變動——用語の變動——漢語佛語の混和——音便の現出

さても言語は如何なる變遷を來したるか。まづ第一に發音の多少變じ來りし

發音の變動

を見る。二三の例をいはず。上古の「いめ」(夢)は「ゆめ」となり。上古の「ぬ」(野)は「と」なり。上古の「あかとき」(曉)は「あかつき」となり。上古の「かもは」(か)は「か」(哉)となりたる類これなり。

用語の變動

第二に用語變じ語氣かはりたるものあるを見る。かの「向つ峰」の如き。「咲きをふる」の如き。「かしこきろかも」の如き。「聞きのよろしもの如き。上古にあらはれし言葉つかひの。中古に至りて再び聞かれぬあるは。その變遷の著るしきを見るべし。さればこゝ後世の學者。この間に一段落線を引きて。上古の言語を古言といひ。中古の言語を雅言とは稱へ分ちたるなれ。

和漢語佛語の混

第三に漢語佛語の混和して普通語となりたるを見る。「屏風の繪」といひ。「瀧をらんず」といひ。「花のしなひ三尺六寸」といひ。「りやうあんの年」といひ。「すくせ」といひ。「さうぞく」といひ。「ほとけ」といひ。「關伽」といふが如き。専ら和歌の詞書にしるし物語の文に用ひて。誰も外國語視せざるに至れり。見よや上古には止むを得ざる場合にのみ用ひられたる漢語佛語は。今や日用言語に溶解消化して使はるゝまでに進みしを。



音便の現出

第四に音便の言葉のやうく現じ來れるを見る。「まゝまゝの宮をまゝまゝの宮」といひ。「まゝまゝの宮をまゝまゝの宮」といひ。「まゝまゝの宮をまゝまゝの宮」といひ。つかへまつるをつかうまつるといふが如き。これなり。以て用語の次第に自在流調になりゆくさまを見るべきなり。

あはれ中古の言語は。たゞ美しき一方に傾くのみか。日は一日と豊富を極めゆかんとす。後の歌文に従事するもの。一に模範を當時に取るは。又故なからずやは。

第二十四章 漢學の勢力

漢文の佳作——詩の佳作——四六文體——對句の構造——詩文の和習——白氏文集——私學校起る——漢文の著作——詩文の名家——國史の編纂——平古止點

れより新奇の事物を愛慕するは。古今一般の人情なれば。漢學入り來るや競うて之を學び。學べばよく熱し。熱すればますます面白くなりて。唯醉

ひ唯浮れつゝ。熱度の頂上に達せしは實に中古の前期にあり。されば腕また凡ならざるを出だすに至りしも。此時にありき。先づ試に左の作を讀め。

富士山記

都良香

漢文の佳作

富士山者。在駿河國。峯如削成。直聳屬天。其高不可測。歷覽史記所記。未有高於此山者也。其聳峯巒起。見在天際。臨瞰海中。觀其靈基所盤連。亘數千里間。行旅之人。經歷數日。乃過其下。去之願望。猶在山下。蓋神仙之所遊華也。承和年中。從山峯落來珠玉。玉有小孔。蓋是仙籛之貫珠也。又貞觀十七年。十一月五日。吏民仍舊致祭。日加午天甚美晴。仰觀山峯。有白衣美女二人。雙舞山巔上。去巔一尺餘。土人共見。古老傳云。山名富士。取郡名也。山有神。名淺間大神。此山高極雲表。不知幾丈。頂上有平地。廣一許里。其頂中央。窪下體如炊甑。甑底有神池。池中有大石。石體驚奇。宛如蹲虎。亦其甑中。常有氣蒸出。其色純青。窺其甑底。如湯沸騰。其在遠望者。常見煙火。亦其頂上。匝池生竹。青紺柔幘。宿雪春夏不消。山腰以下。生小松。腹以上。無復生木。白沙成山。

其攀登者。止腹下。不得達上。以白沙流下也。相傳昔有役居士。得登其頂。其攀登者。皆點額於腹下。有大泉。出自腹下。遂成大河。其流寒暑水旱。無有盈縮。山東脚下。有小山。土俗謂之新山。本平地也。延曆廿一年三月。雲霧晦冥。十日而後成山。蓋神造也。

屢從雲林院不勝感歎聊叙所觀

菅原道真

雲林院者。昔之離宮。今爲佛地。聖主立賢之次。不忍過門。成功德也。侍臣五六輩。翫風流而隨喜。院主一兩僧。掃苔辭以恭敬。供奉無物。唯花色與鳥聲。拜謝有誠。唯至心與稽首而已。予亦嘗聞于故老。曰。上陽子日。野遊厭老。其事如何。其義如何。倚松樹以摩腰。習風霜之難犯也。和菜羹而嚼口。期氣味之克調也。况年之閏月。一歲餘分之春。月之六日。百官休暇之景。今日之事。今日之爲。豈非爲無爲事無事乎。予雖愚拙。久習家風。廻輿有時。走筆無池。聯舉一端。文不加點云爾。謹序。

櫻花

平城天皇

昔在幽巖下。

光華照四方。

忽逢攀折客。

含笑亘三陽。

詩の名作

送氣時多少。

垂陰枝短長。

如何此一物。

擅美九春場。

和左金吾將軍藤緒嗣過交野離宮感舊作

嵯峨天皇

追想昔時過舊館。 淒涼淚下忽露襟。 廢村已見人烟斷。  
荒院唯聞鳥雀吟。 荊棘不知歌舞處。 薜蘿獨向戀情深。  
看花故事誰能語。 空望浮雲轉傷心。

山家秋歌

紀長谷雄

一身漂泊厭浮名。 試避喧々毀譽聲。 秋水冷暮山清。  
三間茅屋送殘生。 登臨南北又東西。 本自齒人不定栖。 秋鶴老暮猿啼。  
結交留宿舊青溪。 門前秋水後秋山。 盡日蕭々眺望閑。 人不到路難攀。  
唯看隨例暮雲還。

山中有仙室

菅原文時

丹竈道成仙室靜。

山中景色月花低。

石牀留洞嵐空掃。

玉案拋林鳥獨啼。

桃李不言春幾暮。

煙霞無跡昔誰棲。

王喬一去雲長斷。

早晚笙聲歸故溪。

四六文體

對句の構造

詩文の和習

之を上古に比べて。巧緻婉麗の妙を極めたるを知らん。かの四六文體の大に行はれたるも此時にあり。對句の構造に重きを置きて。律詩を練るに汲々たりしも此時にあり。然れども之を學ぶに。師とするところ唐人にあらざるが故に。謂はゆる和習を帯び來り。これのづから平安京體の漢文漢詩ともいひつべき臭味あるは。又まぬかるべからざるところ。而して其最も日本體に近くして。當時の文人社會に歡迎せられしものは。唐の白居易が白氏長慶集一名白氏文集これなり。

白氏文集

歴史に曰く。嵯峨天皇ある時河陽館に幸し。詩を作り給へりとして。閑閑唯聞朝暮鼓。上樓遙望往來船。と示させ給ひしに。小野篁申しけらく。遙の字を空に改めば。聖作更に妙ならんと。天皇驚き宣はく。此は白氏の句なり。本は空なりしを戯れに換へたるのみ。汝が詩思居易に同じきかと。此時長慶集

一部はじめて至り。獨り秘府の内のみ藏せられて。世に未だ聞せしものあらざりしかば。天皇ことさらに筆を試み給ひしなり。と。以て此集の渡り初めたる時代を知るべし。

これより漸く世に行はれて。水の低きに就くが如く。苟くも文を作り詩を賦するものは。取つて摸範とせざるなく。寫して座右にせざるなきに至りしのみか。遂には和歌の思想さへ。物語文の骨子さへ。顧問を之に仰ぐまでの有様を現じ出だしぬ。あはれ長慶集の書。當時にあつては。實に外來の一賓客として優待するのみに止まらざりしなり。

私學校起る

漢文漢詩かくの如く隆盛の運に向ふと同時に。官私すべて此學を重んぜざるはなく。朝廷は大寶令の示す處に依つて學政を布き。私學校には菅原氏の文章院。藤原氏の勸學院。橘氏の學館院。親王家の淳和院。在原氏の非學院など起りて。子孫家庭の教育を非勵せしかば。その勢力も従つて一層の熱度を高めたり。記臆せよ。延暦遷都百年の間は。特に皇族貴族に歌人少なくして。詩人多くはしむ時代なりしを。是れまた世の流行に水源を與へたる一因と

やいふべき。

今この漢文流行の結果として。公にせられたる書の主たるものを擧ぐれば。左の如し。

漢文の著作

桓武天皇の御宇には。續日本紀の成れるあり。菅野真道藤原繼繩勅を奉じて之を撰べり。

平城天皇の御宇には。古語拾遺の成れるあり。大同類聚方の成れるあり。甲は齋部廣成の筆。乙は安倍眞直出雲廣貞等の撰に係る。

嵯峨天皇の御宇には。藤原冬嗣等の撰なる内裏式ねよび弘仁格式あり。萬多親王以下の撰なる新撰姓氏録あり。

淳和天皇の御宇には。清原夏野等の撰なる令義解あり。仁明天皇の御宇には。日本後紀の成れるあり。撰者は藤原冬嗣ともいひ。又は藤原繼繩とも傳へたり。

清和天皇の御宇には。續日本後紀の成れるあり。藤原良房等これを撰す。また貞觀格式の撰あり。藤原氏宗等勅を奉ぜり。

陽成天皇の御宇には。文德實錄の成れるあり。都良香菅原道眞等の撰に係る。宇多天皇の御宇には。菅原道眞の類聚國史あり。

醍醐天皇の御宇には。三代實錄の成れるあり。大藏善行等これを撰ず。延喜格式の成れるあり。藤原時平等これを撰べり。

かくて源順が和名類聚鈔の成れるは。冷泉圓融二帝の頃にあるべく。藤原明衡が本朝文粹の成れるは。一條天皇の御宇にやあらん。類聚鈔は漢文もて和語を解釋せし辭書の祖にして。文粹は嵯峨天皇以來名家の詩文を撰集せしもの。一讀たゞちに當期詩文の盛況を掬するに至りぬべし。りの作者は誰々ぞ。

詩文の名家

曰く菅三品。曰く源英明。曰く紀齊名。曰く源順。曰く前中書王。曰く大江以言。曰く大江朝綱。曰く村上天皇。曰く橘在列。曰く清原眞友。曰く慶保胤。曰く後江相公。曰く巨爲時。曰く都良香。曰く善相公。曰く澄相公。曰く藤春海。曰く菅淳茂。曰く統理平。曰く藤博文。曰く橘直幹。曰く大江匡衡。曰く紀淑信。曰く藤惟貞。曰く江舉周。曰く高五常。曰く平兼盛。曰く藤篤茂。曰く藤倫寧。曰く文屋如正。曰く源爲憲。曰く藤冬嗣。曰く野相公。

國史の編纂

曰く藤氏宗。曰く藤時平。曰く都在中。曰く野美材。曰く藤惟成。曰く菅雅規。曰く紀在昌。曰く高積善。曰く橋正通。曰く田達音。曰く菅輔昭。曰く高相如。曰く源相規。曰く藤雅材。曰く紀淑學。曰く紀貫之。曰く戸部齊信。曰く源道濟。曰く藤行葛。曰く僧寂照。共に是れ當時の作者を代表する人々。ことに掲げて讀者に示すも。あながち無益のわざにあらず。終に臨みて一言すべきは。當時國史の編纂。すべて古事記體によらずして。日本紀體をのみ用ひし事これなり。うもく國史は。我國民の歴史なり。我國民の歴史を記すに。我國民の言語を捨てず。他の國民の文章を擬す。いかに迷へるの甚しきにあらずや。然れども。宣命と和歌とのみは。之を漢文に譯せずして。原文のまま載せたるは。せめてもの幸なりといはんよりも。寧ろ我國文學研究の上に與へし功勞の多きを。感謝せざるべからず。さて此頃。漢文の讀方は如何なりといふに。今日と同じく譯讀法にして。その訓點は乎古止點といふものを附し。それを標準にして讀みたるなり。乎古止點とは。先づ點讀といふものを定め置き。一の文字を角形に見なして其

乎古止點

或る場處に點を打ち。其定めたる訓點に當てはめて。讀方を知るの法なり。此點讀は専門の家々により。人々によりて工夫を異にすれば。一々は擧ぐるに暇あらざれども。左に示すは宇多法皇の御作にて。京都の仁和寺に傳へしものなれば。各種のものを代表せしむべき價は。十分ありなん。

●フ	●ケル	●ハ	●切點
●コト	●ノ	●ヌ	●懸點
●ニ	●トキ	●タ	●返點

  

ノキ	ノケ	ノサ
ノメ	ノア	ノヌ
ノセ	ノラ	ノタ

是が後世の漢文訓點の起原にはありける。

### 第二十五章 假名の發明

平假名——弘法大師——片假名——吉備真備

余は既に。漢字を利用して國文を書き取る方法の。上古に起れる事を語れり。古事記の如き。萬葉集の如き。即ち是なりき。今繰り返して手短かにいはむ。

これに二法あり。その一は。

青丹吉 寧樂乃京都者 咲花乃 薰如 今盛有

の如く。音訓交へて記せるものなれば。其文字自身が精密なる發音を示す能はず。されば此歌。上の句は。「あをによしならのみやこはさくはなの」と。先づ容易く讀み下さるれど。下の句に至りては。「かをるがごとく」とも。「かをるごとく」とも。「かをるごとく」とも。「かをるごとく」とも。「にほへるごとく」とも。「にほふがごとく」とも。さまざまに讀まば讀まるべし。

されば今これを第二の書方にして。

阿遠爾與之 奈良乃美也古波 佐久波那乃

仁保布我基登久 以麻佐加利那里

と一音に一字を當てつゝ書き下さんには。その便利れよぶべくもあらず。然れども一利一害は影と形の如く。讀者には此一音一字の書方こそ。便利なる事萬々なれども。筆者には字數はるかに多くなりて。不便利なること夥しければ。遂に字數を減ぜずして。手數を減すべき方法を工夫し。漢字を草體に

平假名

弘法大師

爲したるものを更に崩して。一種の簡易流麗なる字體を作り出だせるが。今日吾人の便益を感じつゝある。假名文字の起原これなり。古は多く之を草體草體名と呼び。後世は常に平假名と名づく。

世に傳へ曰ふ。弘法大師(僧空海の諡號)平假名を作り。いろは四十七文字の歌に綴りて世に弘めたりと。此說當れりや否やは。輕々しく判断すべからざれども。弘法大師は絶代の能書家にして。博學卓識の大徳なれば。その書體を定め。これを民間に弘むるなどの事業には。與かつて功勞多りしこと疑ふべからず。されば大師一人の手に生まれしや否やは知るべからねど。大師の手に育てられて。我國社會の一大要具となりたるは。また事實の許すところなるべし。

頼阿法師(南北朝の頃の高野日記には曰へり。海象高野山の僧)の縁ある事ども宣ふ中に。大師此山を伐り開かせ給ひて。堂立てさせ給ふに。木の道の工。文字の事を知らねば。記し合はず料も無しとて。いろはの四十八字(京の字を加へたる數なり。されど大師の時に。京の字のありたるにはあらず)を教へさ

せ給ひしより。末の世の人の助にもなりぬき。聞ねしかば。云々。と。平假名と大師との關係。いかでか忽せに看過せらるべき。いろは四十七文字の歌の事は。次の章にいふべし。

片假名  
吉備眞備

平假名に次ぎて便利なる。片假名も出で來れり。此文字は奈良の朝に。吉備眞備の作り出でたる如く。世に言ひ傳ふれども。一の一人の手に生まれしものなるまじきは。筆者の古き程。さまざまの書體ありて一定せず。時代の降るに従ひて。漸次に字體の定まりしを以ても。その行はれたる。平假名の後にありて。前にあらざりしを思ふべきなり。

そもく片假名の字體は。或は伊の扁を取つてイとし。或は宇の冠を取つてウとせし如く。謂はゆる萬葉假名の二三畫を取りて。簡單に作りし符號文字なれば。其目的は。漢文經文の音譯傍訓點等に用ひんが爲めに。出でたるならし。

さるは小野道風の書ける經文を始め。日本紀延喜式江家次第論語漢書などの古本傍訓に。古體片假名の傳はりたるを見ても知るべく。嚴格なる漢文の傍

に。婉麗なる平假名の適せざるによりて。書き出だしたるものならんと思はるゝなり。

然れども後々に至りては。平假名と並行して和歌和文を書く器ともなり。將門記今昔物語後撰集神樂歌の類。本文を片名假もて書きたるものも。出で來にけり。

あゝ此假名の發明こう。實に我國文學の進路を導きたる指南車にはあれ。誰か賤しめて女文字とは呼びたるものぞ。滿腔の熱血を注ぎて。ために女權擴張を主張すべきは。たゞ此假名文字にあり。

## 第二十六章 長歌の頓挫

和歌衰頹の敵——興福寺僧の作——古今集時代の作——萬葉集との比較——句格の變遷——五七體——七五體

平安京の始にあたりて。漢文の勢力は強敵の如く。和歌の領内をさへに蹂躪して。僅に一孤城を除すのみ。詩賦の流行は洪水の如く。和歌の境域に漲り

和歌衰頹の敵

來りて。獨り一高地を殘すのみ。何ぞ天道人事の無情なる。顧みて上古の昔を思へば。「我は忘れず打ちて止まむの勇壯凜烈たる御製より。婉麗悲哀華美質朴。千態萬狀兼ね備へざるは無き萬葉集に至るまで。一歩々々と進み來りて。遂に青によし奈良の都は咲く花の匂ふが如く今盛なり」とも稱讃しつべき盛運に達せしものが。一たび躓いて又起たざるは長歌なり。家持去つて百年の間。いさゝか古色を存じて見るべきものは。仁明天皇の御時に。興福寺の僧の奉りたる長歌を措きて。世に傳はるもの絶えて有らず。嘆かはしからずや。

興福寺僧の作

延喜年中に至り。古今和歌集の勅撰成るや。その前後にあたり。再び絶えたるを興して。長歌よむ人の出で來りしといへども。調ゆるみ言葉たるみて。骨も力も無きものとなりはてたるは。先づ古今和歌集に載せたるものを見て。其他を推すべし。

古今集時代の作

試に眼を既往に回らして萬葉集を見よ。

わたつみは あやしきものか

淡路島 中に立て置きて

萬葉集との比較

白波を 伊豫にめぐらし 居待月 明石の門ゆは  
 夕されば 沙を満たしめ 明けされば 沙を干しむ  
 汐さぬの 波をかこみ 淡路島 磯がくりぬて  
 いつしか 此夜の明けも 待つからに いの寐らねば  
 瀧の上の 浅野のきざし 明けぬとし 立ちとよむらし  
 いざ子ども あへて漕ぎども にはも静けし  
 いかにか調張り言葉しまり骨あり力あるの作ならずや。之に引き替へて古今和歌集を見よ。

逢ふ事の まれなる色に 思ひ初め 我身は常に  
 天雲の 晴るゝ時なく 富士の嶺の 燃わつゝとはに  
 思へども 逢ふ事かたし 何しかも 人を恨みむ  
 わたつみの 沖を深めて 思ひてし 思ひは今は  
 いたづらに なりぬべらなり 行く水の 絶ゆる時なく  
 かくなはに 思ひ亂れて 降る雪の けなげぬべく



思へども 術府の身なれば  
 足引の 山したみづの  
 誰にかも 相かたらはん  
 墨染の 夕になれば  
 嘆きあまり せんすべなみに  
 白妙の 衣の袖に  
 思へども 猶なげかれぬ  
 あはれとおもへば

なほやまず 思ひは深し  
 木がくれて たぎつ心を  
 色に出でば 人知りぬへみ  
 獨居て あはれく  
 庭に出で 立ちやすらへば  
 れく露の けなばけぬべく  
 春霞 よそにも人に

以て其調のゆるみにゆるみ。斯道の衰へに衰へたるさまを。吟じ味ふべきぞかし。

然れども此歌は猶その句格を古にす。すなはち上古の長歌は。言葉の續き。七文字五文字にあらすして。五文字七文字となりたるが定格なるを。此歌いまだ破らざればなり。是より後は。初句を五文字に起して末句を七文字に結ぶ格こそ上古に變はらねども。其他はすべて七文字五文字と連ねゆく事に

句格の變遷

五七體

う爲りゆきたれ。是れ長歌の上に取りては一大變遷といふべきなり。よりて上古の句格なるを五七體長歌といひ。中古の句格なるを七五體長歌といふ。萬葉集の。

駿河なる(五) 富士の高嶺を(七)

天の原(五) ふりさけ見れば(七)

渡る日の(五) 影もかくろひ(七)

照る月の(五) ひかりも見えず(七)

白雲も(五) いゆきはがかり(七)

時じく(五) 雪は降りける(七)

は五七體にして。古今集の。

いかほの沼の(七) いかにして(五)

おもふ心を(七) のぼへま(五)

あはれいにし(七) ありきてふ(五)

人まろこそは(五) うれしけれ(五)

七五體

は七五體なり。比較して見ば。其差ちのづから明かならん。

### 第二十七章 當期の歌謠

詠歌との分離——儀式的の歌謠——神樂歌——催馬樂——之に屬せる  
樂器——其句格——其用語——其章段——風俗歌——今樣歌——和歌  
の起原

我發したる言語に我曲節を附し。適宜に調べなしたつて以て歌ひ以て舞ふ。是が上古開闢の歌謠にして。此時いまだ歌ふべき歌と。たゞ作りて樂しむべき歌との別あらざりしなり。

其後三韓唐土の樂譜は樂器と共に渡來し。我國朝廷の式樂を一變して。樂曲は一定官撰のものとなり。昔は口して吟じたる歌も。今は文字して寫さるる世となりしかば。音樂的の歌は曲譜の支配を受けて一種の形を定め。文學的の歌は口に誦し目に見て調をなしたる以上は。其他に音樂の支配を仰がざる有様となりぬ。此に於て謂はゆる詠歌と歌謠とは。全く分離の實をあらはし

詠歌との分離

儀式的の歌謠

たり。唯かの神樂歌を始とし。大嘗會の御式に歌はるる大歌所の歌曲の如き。歌人のよみたる短歌に節つけて歌ふ事はあれども。そはたゞ儀式として古風を存せらるるに止まりしのみ。

りの歌謠の領地を占有するものは。一を神樂歌といひ。二を催馬樂といひ。三を風俗歌といひ。四を今樣歌といふ。

神樂歌

神樂歌は神前に奏する歌曲なり。朝廷の式樂と爲れるものゝ曲目をあぐれば。

庭燎

採物

櫛

片折

諸舉

韓神

大前張

宮人

幣

杖

篠

弓

劍

鉾

杓

難波潟

木綿志天

前張

階香取

井奈野

脇母古  
 小前張  
 薦枕 閑野 磯等 篠波 殖槻 總角  
 大宮 湊田 葦 千歳 早歌  
 星  
 吉々利々 得錢子 木綿作 晝目歌 弓立 朝倉  
 其駒 竈殿歌 酒殿歌  
 この外になほ大和舞あり東遊ありて。諸神社に奏せらる。東遊には。駿河歌。求子歌。大廣歌などの次第あり。催馬樂は遊宴の興に用ふる歌曲なり。うの定まりたる曲目は。

- 我駒 澤田川 高砂 夏引 貫河 東屋  
 飛鳥井 青柳 伊勢海 庭生 我門爾  
 大路 大芹 淺水 挿櫛 應子  
 道口 更衣 何爲 鷄鳴 老鼠  
 梅枝 櫻人 葦垣 山城  
 葛城 竹河 河口 此殿者  
 應山 美作 藤生野 妹與我  
 席田 大宮 總角  
 酒飲 田中井戸 無力蝦  
 眉止之女  
 石川 奥山 我家

催馬樂

走井 飛鳥井 青柳 伊勢海 庭生 我門爾  
 我門乎 大路 大芹 淺水 挿櫛 應子  
 逢路 道口 更衣 何爲 鷄鳴 老鼠  
 呂  
 安名尊 新年 梅枝 櫻人 葦垣 山城  
 眞金吹 紀伊國 葛城 竹河 河口 此殿者  
 此殿西 此殿奥 應山 美作 藤生野 妹與我  
 淺綠 青馬 妹之門 席田 大宮 總角  
 本滋 箕山 眉止之女 酒飲 田中井戸 無力蝦  
 難波海 鈴之川 石川 奥山 我家

催馬樂といふ名は。一曲の題目なるさいばりより出でたりともいひ。又一説には。我駒の曲なるいで我駒はやく行きこせ待乳山といふ歌の。馬を催し早むる意より名づけたるが。總稱になりたるならんともいふ。以上二種の歌謡は。當期に出でる歴代絶えず。現今に至りても猶俗人の家に之に屬せる樂器

傳へらるゝは。人の皆知るところ。之に合はせ用ふる樂器は。その物により多少の相違はあれど。概して言はゞ。横笛。篳篥。笙。和琴。箏。琵琶。笏拍子の類なり。

そもく此歌。その作の起原を尋ねれば。上古より來れるもあり。中古の初期に成れるもあるべく。やゝ後になりて新曲の加はれるもあるべしといへども。全體よりいへば。初期に起れる歌を本として。中頃に選定を成就し。末期に至りては既に人口に膾炙し。古曲として引用せられしは事實なり。中には短歌を其まゝ用ひしも。句を足し言葉を添へ。又は多少かへて作れるも多し。佛足石の歌體を用ひしさへありて。歌謠獨得の體のみにはあらざれども。殊に此に歡迎せんとするものは。うの一種異様の特色を示せる作にあるなり。

さて其謂はゆる詠歌。すなはち。古今和歌集などに載せられたる和歌と異なる點は。句格にあり。

田中の井戸に。光れる田水葱

其句格

摘めく吾子女 田中の子あこめ  
なんばの海 なんばの海

漕ぎもてのぼる 小舟大舟 筑紫津までに

今すこしのぼれ 山崎までに

しづやの小菅 鎌もて刈らば

生ひんや 生ひんや小菅

見よ長歌短歌の句格とは似もつかずして。後世歌謠の祖門をこゝに開きつゝあるを。是れ一つ。

次は當時の俗語を避けず嫌はずして用ひ。音便をも字音をも遠慮なしに用ひたるにあり。

近衛の御門に 巾子あといつ

髪の根の なければ

女の財は

霜月しはすの かきこぼり

其用語

西寺の 老鼠ねずみ 若鼠

御裳みもつんづ 袈裟けさつんづ

法師に申さん 師に申せ

酒をたうべて たべ酔うて

たふとこりんずや まうでくる

なよろほひそ まうでくる

見よ詠歌には未だ輕々しく用ひざる言語を用ひて。自在に言ひ下すの氣力あるを。是れ二つ。

次は長歌にも未だ例あらざる章段の重ねかたにあり。

其章段

夏引

一段

なつびきの 白糸 七はかりあり

狭衣に 縫ひても着せん

汝妻なれめはなれよ

二段

かたくなに 物いふ女かな

汝麻衣なまぎも 我妻なれめの如く

袂たもとよく 着よく肩よく

こくび柔かに 縫ひ着せめかも

紀伊國

一段

紀の國の 白良しろらの濱に ましらとの濱に

ありぬる鴈 うの玉もてこ

二段

風しも吹いたれば 餘波なごりしも立てれば

水底みづそこきりて うの玉見えず

見よ現今おこなはるる唱歌などの章段に髣髴たるを。是れ隋唐三韓の樂曲に繰返す事のあるより來れるならめど。此後絶えて我國の歌謠には影も無き事

風俗歌

が。獨り中古に行はれ。而して今日輸入し來りし歐米の唱歌に似たる事のあるは。れもしろからずや。

此外に風俗歌とて。諸國の歌謠を集めてうたふ曲あり。其よきものは撰ばれて催馬樂に入りたるも多かるべく。漏らされたるは。なほ催馬樂と共に貴人の間に行はれたり。

此歌も大に發達を獎勵したらんには。謂はゆる言文一致體の通俗歌曲も。日に月に興り榮ゆべかりしを。只空しく朝廷伶官の司るところとなりて。新作を加へ新譜を試むべき便路を開かざりしかば。歌ふべくして作るべからざるものと爲り。徒に神さびたる古曲と仰がるゝのみにて。又と文學者の手に再生する能はざりしは。時運また然らしめしに因るか。

今様歌

今一つ今様歌の事を語らざるべからず。今様とは當世風といふ事にて。謂はゆる新體詩の意味なり。されば奈良朝以前の古格に泥まらずして。言葉新らしく句格かはれるものを稱する名なれば。かの神樂歌も其幾部は今様歌と稱すべく。催馬樂も風俗歌も概して今様歌と稱すべきは勿論なれども。是は既に

あの一々名稱を有せるが故に。遂に今様歌とは七文字五文字の句を四つばかり重ねたるものにて。一種の歌ふべき曲と定まりたるなり。

うの起原くはしくは知られずといへども。古來空海の「いろは歌を以て祖となせり。空海は佛法を普く説かんとして之を作り。假名文字の便を教ふると共に世に傳へしなり。さて其佛法を説くとは如何。

いろはにほへど ちりぬるを

わがよたれが つねならむ

うののれくやま けふこにて

あさきゆめみし ゑひもせず

すなはち涅槃經に出でたる四句の唱を譯述せしものにて。初句は色葉は句ひても遂には散りて跡なきよしにて。「是生滅法」の意。二句は我世すべて無常なるよしにて。「諸行無常」の意。三句は有爲轉變の奥山を打ち越えて悟の道に入らんとするよしにて。「是生滅法」の意。四句は人間界はすべて淺はかなる一夢にして醉ひも迷ひもせざるよしにて。「寂滅爲樂」の意なりけり。あはれ空海ほ

和讃の起原

どの人ならざりせば。いかでか斯かる深遠の佛説を。一首の歌にまどめ。殊に文字の敷を限り。同音の字を用ひずして。誰か又容易に作り出でん。長く後世和讃の模範を垂れ。兒童習字の手本に書かれて。千載ほろびざるも宜ならずや。

### 第二十八章 短歌の興隆

六歌仙——宇多醍醐の兩帝——古今和歌集——村上天皇——後撰和歌集——新撰和歌集——古今和歌六帖——家集——歌合——物の名——折句——香冠——日本紀覽宴の歌

平安遷都の後。文學百年の露命を短歌作者に依りて繋がれおたる事。既にしばらくいへり。此間に出で、其名高く聞えしは。古今和歌集の序にいへる六人の歌仙なりき。すなはち僧正遍昭は。歌のさまは得たれども誠すくなじ。たとへば繪にかける女を見て。いたづらに心を動かすが如し。と評せられ。在原の業平は。うの心あまりありて言葉たらず。しぼめる花の色なくて句の

六歌仙

これるが如し。と評せられ。文屋の康秀は。言葉は巧にて其さま身に負はず。いはゞ商人のよき衣きたらんが如し。と評せられ。宇治山の僧喜撰は。言葉かすかにして始め終りたしかならず。いはゞ秋の月を見るに。曉の雲にあへるが如し。と評せられ。小野の小町は。古の衣通姫の流れなり。あはれなるやうにて強からず。いはゞよき女の惱める處あるに似たり。と評せられ。大伴の黒主は。うのさま賤し。いはゞ薪おへる山人の花の陰に休めるが如し。と評せられたり。萩あり薄あり女郎花あり。秋は色々の花なればこり。野邊の景色は面白けれ。六人六様の特色を見る。さびれたる時代なりとて。いかでか百年間の舞臺を等閑に看過さるべき。況んや範を後世に垂れ。興隆の時期を招き誘ひたる指導者として謝すべきあるをや。

宇多醍醐兩帝

宇多醍醐兩帝の頃に至りて。斯道大に興り。上には禁中の御歌合あり。勅撰歌集の御事ありて。専ら斯道を非勵せさせ給へば。下には我劣らじと斯道に心を寄せて。歌たてまつる人々いよく多し。寛平延喜の文學。今が春雨にあひて色うふ草葉の如くに萌むわたりゆく。而して歌としいへば。なべて短

古今和歌集

歌の一方に全力を注ぐ世の中とはなりにけり。

醍醐天皇は。紀貫之。紀友則。凡河内躬恒。壬生忠岑の四人に勅して。古今和歌集を撰ばしめ給ふ。古の事をも忘れじ。ふりにし事をも興し給はんが爲め。今も見うなはし。後の世にも傳はれとの御慮に出で。萬葉集に入らぬ古歌。ねよび現今の人の歌をも。撰び集めしめ給ひしなり。撰成りて奉りしは。延喜五年四月十八日なりき。之を勅撰の始とす。

順徳院の八雲御抄にいはいはく。歌のさまを廣く心得んには古今第一なりと。阿佛房口傳にいはいはく。歌の本體には古今を見覺えて本歌にもすべしと。古來の信重を受けたるは。是にても知らるゝなり。かの萬葉の強く質素にして大丈夫的なるを。この古今の美しくなだらかにして手弱女風たぢめかぜなるとは。比べ讀みて其沿革を味はざるべからず。

村上天皇

之に續きて勅撰の御舉ありしは。村上天皇の天曆年中。大中臣能宣。清原元輔。源順。紀時文。坂上望城の五人。禁中の昭陽あけひら一名梨壺に參集して。古今和歌集に漏れたる歌。ねよび其以後の歌を撰びたり。名づけて後撰和歌集

後撰和歌集

といふ。されば五人の撰者を。世には梨壺の五人とぞ呼びなしたる。

鴨長明の無名抄にいはいはく。後撰には。よろしき歌古今に取り盡されて後。幾程も經ざりければ。歌得がたくして。姿をば撰ばずして心を先とせり。と。阿佛房口傳にいはいはく。後撰にはやさしき歌多く。又みだりがはしき歌も多く交りたり。梨壺の五人。心々やかはりけん。と。前栽の櫻。野山の董。彼には彼の色香あり。此には此の風情あり。

新撰和歌集

貫之また。古今和歌集の中より最もすぐれたる歌を撰びて奉れとの勅を奉じ。土佐の任所にて筆を執りしを。任滿ち京に歸るに及びて。醍醐天皇崩御ありしかば。奏覽を經ずして勅撰の内に加はらず止みぬ。新撰和歌集すなはち是なり。これをや假に私撰の始ともいふべき。

古今和歌六帖

貫之娘あり。古今和歌六帖を撰びたり。一名を紀氏六帖ともいふ。かの古今の和歌集を衣冠せる装と見れば。六帖は打ち解けたる平服の姿ともいふべきか。

勅撰に私撰に。この盛なる時世にあひて。赫奕たる光を萬世に垂る。實に文



家集

學史中に特筆大書すべきは。延喜天曆の聖代にあり。而して紀氏の斯道に殘せる足跡。殊に記臆すべきなり。

さても貫之前後にいで自家の歌集を世に遺せるもの。曰く小町集。曰く業平集。曰く遍昭集。曰く素性集。曰く千里集。曰く伊勢集。曰く菅家御集。

曰く友則集。曰く興風集。曰く敏行集。曰く是則集。曰く宗子集。曰く敦忠集。曰く躬恒集。曰く貫之集。曰く齋宮集。曰く忠岑集。曰く忠見集。曰く

頼基集。曰く元輔集。曰く重之集。曰く信明集。曰く中務集。なほ此外にも

多し。あに盛ならずや。但し同じく家集の内にて。自家の筆記にかゝれる

もあり。又は後より書き集めたるもあり。

かくの如く歌人輩出し。斯道ますます盛運に向へる結果として。一つ心を種

として萬の言の葉となるといはれし歌は。やうく泰平の遊戯術と爲り。雲

の上人が力くらへの競争品となり來れり。之を歌合といふ。古くは在民部卿(在原行平)家歌合あり。寛平の御時后の宮の歌合あり。淳子院の歌合あり。同じ院の有心無心歌合あり。陽成院の歌合あり。然れども寛平

歌合

のを除く外は。勝負を定めたる迄にて。よしあしを論斷するほどに進まざり

しを。村上天皇の天徳四年内裏歌合に至りては。左大臣藤原實賴をもて判者

とし。判の詞を書かせなど。此事いよく儀式を爲し。名譽の術となりしよ

り。一言のもとに褒貶さだまる事なれば。之が爲めに負けし笑はれし心を

勵ますもの多く。従ひて我おのづからなる長所を枉げても。判者の意に叶ふ

歌をよまんと勉めつゝ。かの學校生徒の試験點數を目安にして。學問すると

同じ弊風に陥りはてぬる。さてこゝ野山の草花を天然のまゝに咲かせずし

て。一人の好む盆栽に作り育てんとする如き歌道の收縮を。暗々裏に誘ひ爲

したるものなりとはいへ。とにかく斯道の榮え來りし結果として喜ぶべきな

り。天徳歌合の如何なるものなりしかは。左の一二例によりて知るを得ん。

一番 霞

左勝

朝忠

くらはしの 山のかひより 春がすみ

年をつみてや 立ちわたるらん。

右

兼盛

ふる里は 春めきにけり みよしの

みかきの原を 霞こめたり

左右歌讀合。勅小臣曰。可定奏勝劣者。遂巡奏云。小臣纔雖備三十  
一字。全難辨勝劣之義。伏請天裁。勅云。若不定勝劣者。已失今日  
興。兼結後代辭歎。猶速可定申者。遇天氣之不許。表空慮之拙而已。  
左歌くらはし山に年をつむといへることよろし。又橋に渡るといふ  
も左もありなん。歌のふるまひもさてありなん。右歌などか故里に  
しも春めかしけん。霞こめたらんも恐ろしげにや。此間只在勅定。  
小臣屢候天氣。遂無左右仰。因以左爲勝。

二番 鶯

左勝

順

氷だに とまらぬ春の 谷風に

まだうちとけぬ 鶯のこゑ

右

兼盛

わが宿に うぐひすいたく 鳴くなるは

庭もはだらに 花や散るらん

左歌心ばへいとをかし。右歌よしなき花ちらすも。ことなる興なく。  
言葉もよろしからず。以左爲勝。

りの盛運に達せし結果は。力くらへの歌相撲のみに止まらず。又一方には。  
細工して其術を誇るの蕪弄物ともなりにたり。

物の名

物の一つは物の名なり。一の言葉を他の言葉の中に隠し入れたるもの。「李の  
花をいはんとして。

今幾日 春しなれば うぐひすも

ものはながめて 思ふべらなり

「山柿の木をいふとは。

秋は來ぬ 今やまがきの きりくす

よなく 鳴かん 風の寒さに

折句

とよめる類これなり。  
りの二つは折句なり。五文字の言葉を毎句の頭に一字づつおけるもの。「かきつばたを冠らして。」

から衣 きつゝ馴れにし つまじあれば  
はるくきぬる たびをしづ思ふ

沓冠

とよめる類これなり。  
りの三つは沓冠なり。十文字の言葉を毎句の上下におけるもの。「合はせ蒸物すこしをいはんとて。」

あふ坂も はてはゆきこのせきも居ず  
たづねて訪ひこ きなば歸さじ

とよめる類これなり。

この外に今一ついふべきものあり。博士を禁中に召して日本紀を講ぜしめ給ひし事は。御歴代の御式なりしが。りの一部講じ畢へて後。日を撰びて竟宴の御筵を開かせ給ふ事あり。りの時に侍臣の紀中人物を題にて。よみて奉れ

日本紀竟宴の歌

る歌を日本紀竟宴歌といふ。歌體のづから古雅淳朴にて。強く雄々しき節あはく。而して後世詠史の祖となりたるころ。捨てがたけれ。例の二つ三つ抜き出で示さん。

思兼神

おもひがね たばかりごとを せざりせば

阿保經覽

天の岩戸は 開けざらまし

天國排開廣庭天皇欽明天皇

三善清行

佛すら 朝廷かしこみ 白妙の

波かきわけて 來ませるものを

巴提便

誰も子の かなしき時は 身を捨てゝ

藤原忠房

虎の舌きる 名も立ちぬべし

當期の短歌は。語らんとするところ大方終れり。こゝに暫く中古の前期に別

を告げ。後期に至りての再會を待たんとす。殊に記憶に存せしめんが爲め。古今和歌集と紀貫之の名を。ここに重ねて繰り返すを憚らず。

### 第二十九章 散文の勃興

前代の殘物——貫之の懺悔——歌集の詞書——歌集の序——試作の時  
 代——土佐日記——蜻蛉日記——竹取物語——伊勢物語——空翻物語  
 ——大和物語——落窪物語

前代の殘物

露の命危かりし和歌百年間の状態は。既に屢ば語り盡せり。此間にあたり。和文の脈絡たねざる縷の如く。わづかに前代の殘物を。宣命祝詞せんめいしゆきごの他數種のものに見るのみにて。冬枯れはてたる世の中なりき。

貫之の懺悔

然れども時雨すぎ霞去り雪封じて後。一陽來復。つひに待たれし春は來り立てり。紀貫之は土佐日記の劈頭に曰へり。男もすなる日記といふものを。女もして見んとてするなり。と。是れ作者みづからの身を。假に船中一女子の地位に置きて書けるにて。内心には和文の衰頹を慷慨し。余は世間流行の漢

歌集の詞書

文摸擬の柔弱男子たらんは欲せず。寧ろ余は余の思想を余の言葉もて言ひあらはすところの日本女子たらんとの。抑へかねたる滿腔の熱情を。この數言に發せしなり。

歌集の序

貫之は古今和歌集撰者の筆頭なり專任者なり。古今和歌集の撰定は萬葉集に繼がしむべき徹慮なりしに。貫之は勇敢にも萬葉集の漢文題に習はずして。古今和歌集をば。悉く和文の詞書に改めたり。是が歌集の詞書を和文にせる始にして。りの見識の高き思ふべし。又和文の序を和歌に添ふる事も此集および大井川行幸和歌の序を以て始とすれば。ますく貫之が當時文學のみの代表者にあらざして。我國文の光を永遠ならしめし功勞者として歡迎すべき事も知られなん。天なるかな時運は此一大文學者を待ちて興り。此一大文學者は彼時運を促して來らしめたり。

試作の時代

貫之この勇氣を振り起して。志の柱は突き立てたりといへども。長く中絶したる和文を興す事なれば。何か参考の的を立てざるべからず。之を奈良の時代に取らんか。あまり世を隔てたれば今日の人情に適せず。目前に相談相手となるものは漢文なりしなるべし。こゝに於て大井川行幸和歌の序あり。古今和歌集の序出づ。これを試作の時代といふも不可なからじ。土佐日記に至りては。漢文を擬せず古文を襲はず。一家獨得の文體をなしたるなり。光徳萬丈。千載を照らして朽ちざるも。豈故なからんや。

土佐日記

土佐日記は。承平五年土佐守の任果てて土佐より歸る船中の記なり。この自然なる文中には。社會上の。文學上の感慨を含み。亡くなりたる幼兒の追慕を骨とし。間には滑稽の言語を挟みて船中の徒然を遣るなど。いはん方なき妙味を存せり。

蜻蛉日記

名は同じ日記なれども。旅路の記にあらずして。日々の我ありさまを記し。移りゆく感情を述べ。包まず隠さず筆にしたるは。道綱の母の蜻蛉日記なり。彼は紀行の濫觴にして。是は日記の權輿ともいふべし。

竹取物語

貫之に先だちて出でたるは。竹取物語あり。伊勢物語あり。竹取は源氏物語に。物語の出で來はじめの親。とあるによりて。うの時代の古きを知るべし。かくや姫といふ美人。竹の中より生れて竹取の翁夫婦に養はれおたりしが。其美しきを傳へ聞きて。あまたの雲の上人。心をおくれども更に諾はず。帝よりも仰ありしかと參らんとせず。さるほどに。實は月界の天女なりしを。いさゝかの罪作れるによりて。假に人間界に下されたるなれば。罪つきて天上に歸らんとす。翁れどろきて朝廷に奏聞し。官と兵との威を借りて。迎に來たる天人を防がんとしたれど。うの事かなはずして。天女は飛車に乗りて雲の上に歸りゆく物語を。面白く諷刺的に書きたるなり。

伊勢物語

伊勢は一種の文にて。和歌を本としての物語なれば。名づけて歌物語といへり。作者に就きては伊勢なりといふもあれど。うべなひがたし。記すところは。在原業平初冠の章に起りて。辭世の歌に終り。十の八九は。古今和歌集に見わたる業平の歌に就きて。聞き傳へ又は敷演して作りなしたる物語なれば。業平外傳とやいひつべからん。

書名に就きても敷説あり。或は作者伊勢なればといひ。或は文中に伊勢齋宮の事などあるに因りてともいひ。或は昔より伊勢人は僻言するよし言ひ傳へたれば。僻言物語の意にて。業平の秘事を隠さず書きたるを言へるなりともいふ。後者もつとも然るべきに似たり。

空穂物語

空穂物語は。作者紫式部の父ならんといふ説もあれど。推測に過ぎず。清原俊蔭といふ人の遣唐副使となりて。海外に渡らんとせし途中。暴風にあひ。吹き流されて佛界に至り。琴を佛より傳はり得て歸りしに起りて。俊蔭の没後。うの獨娘の零落せしより。山中に隠れて孝子に養はれ。遂に太政大臣たる人の若君。仲忠の北方となるに及び。うの若君の榮ゆく三十四歳までの事を作れり。題號は。かの山中にて木の空穂を住居とせる事あるに因る。うもく此物語の特に時めかずして止みぬるは。うの文の自然古雅にして。れのづから時好に媚ぶる能はざりし折しも。後期の源氏物語いで。壓倒せしにも因るならん。然れども愛すべきもの。目に美しき花の梢のみにあらずして。縁靜なる常磐木はた捨つべからざるを知らば。空穂あに霜に傲り雪に

大和物語

誇るの特色なしとせんや。

大和物語は。伊勢物語と同種類にて。歌物語の一つなり。されども伊勢は古雅質朴。老翁に對して話を聞くの思あるべく。大和は華麗婉轉。少女の前に言葉を交ふるの感あるべし。以て移りゆく時勢のさまこり味はるれ。

作者は在原滋春なりとも。花山天皇なりともいへど。詳ならぬよしは。既に古人もいへり。題號に國の名を冠せたるは。或は畿内大和の國の物語ある故ともいひ。或は唐土の稗史小説に區別して。我日本國の物語なりとの意味なるべしともいふ。

落窪物語

落窪物語は。是も作者を知らず。中納言なる人の娘あまたある中に。落窪の君とて。異腹の娘ありしが。繼母のためにいぢめられしを。少將なる人。あはれとて遂に呼び取り。末は繼母とも和睦して。兩家めでたく榮ゆる事を作れり。筆力雄健にして。かひなでの作ならず。

物語の盛に起れる事かくの如し。之を今日の小説おこなはるゝ世の中に比ぶれば如何。今日の小説。はたして中古の作の如く。光を萬世に傳ふるものあ

りや。盛なるは古に譲らずといふも。實のあるものは。今に優れりといはざるを得ず。

### 第三十章 著名の作者

齋部廣成(宿禰)

廣成は古語拾遺の筆者なり。大同三年二月十三日に此書を奉れる事と。同年十一月に。正六位上なりし廣成に從五位下を授けられたる外。傳を詳にせず。

小野小町

小町の系圖は種々の説ありて。或は小野篁の孫とし。或は小野良眞の娘とし。或は出羽の郡司某の娘とし。或は小野常澄一説には當澄の娘とし。まぢく傳へたれど。何れも信じがたし。されど仁明天皇の頃の人にて。和歌に堪能なりしと。容顏美麗なりしとによりて。世に名を知られたるは事實なりき。古今著聞集(後深草天皇の頃)に曰く。小野小町が若くて色を好みし時。もてなしありさま。たぐひなかりけり。壯衰記といふものには。三皇五帝の妃も。

漢王周公の妻も。未だ此奢をなさず。と書きたりければ。衣には錦繡の類ひを重ね。食には海陸の珍をととのへ。身には蘭麝を薫じ。口には和歌を詠じて。萬の男をば賤しく思ひ朽たし。女御后に心を懸けたりし程に。十七にて母を失ひ。十九にて父におくれ。廿一にて兄に別れ。廿三にて弟を先だてしかば。單孤無頼の獨人になりて。頼む方なかりき。いみじかりつる榮え日毎に衰へ。花やかなりし貌年々にすたれつゝ。心を懸けたる類ひも。疎くのみなりしかば。家は破れて月ばかり空しく澄み。庭は荒れて蓬のみ徒に繁し。

かくまでなりにければ。文屋康秀が參河様にて下りけるに。さそはれて。わびぬれば 身を浮草の 根を絶えて

さうふ水あらば いなんぞ思ふ

とよみて。次第におちぶれゆく程に。はてには野山にさすすらひける。人間の有様これにて知るべし。と。わびぬればの歌は。古今集にも載せられて事實ならめど。其他の事はいかゞ

あらん。謠曲などに作りて世に言ひはやす。卒塔婆小町などの古事は。是等の傳説よりや出でけらし。

今一つ事實として見るべき話あり。僧正遍昭出家して後。清水の觀音に通夜して經讀む聲の。唯人ならず聞えしかば。小町その人ならんと怪しみて。

岩の上に 旅寐をすれば いと寒し

昔のころもを 我に貸さなん

といひおくれるに。返歌たぢちにある。

世をそむく 昔のころもは たゞひとへ

貸さねばうとし いざ二人ねん

さればこそ遍昭よと思ひて。その讀經の聲を尋ねゆきしに。かきけすやうに失せて。一寺を求めれども遂に行方を知らずといふ事の。大和物語に見えたる是なり。

### 在原業平(朝臣)

業平姓は在原にして。阿保親王第五の御子。官は左近衛中將なりしかば。世

に在五中將と呼ばれたり。兄に行平。子に棟梁。滋春。孫に元方。大津舟(女)などいふ歌人あり。東國に下る道すがら。名歌よみて人口に膾炙せしめしさまは。委しく伊勢物語に見ゆ。

紀貫之は業平の餘韵言外に溢れたる歌を評して。其心あまりありて言葉足らず。しぼめる花の色なうて。匂のこれるが如し。といへり。

月やあらぬ 春やむかしの 春ならぬ

我身ひとつは もとの身にして

これらや其特得の代表者ならまし。

没せし年は元慶四年にて。齡は五十二歳なりき。後世に至り。歌道の神と仰がれて。京都の上加茂境内に祭らる。岩本の社これなり。

### 藤原敏行

藤原武智磨の子にて。右近衛少將たり。二十七歳にて卒す。卒年は詳ならざれども。仁和の頭の人なりき。和歌を以てあらはる。

### 僧正遍昭



在俗の時は。其名を良峰宗貞といひ。左近衛少將にて頗る美男子なりしかば。良少將として世にもはやされたり。父は安世と申して。桓武天皇の皇子にたはしけるが。延暦二十一年姓を賜ひて。臣下の列につらなり給へりき。嘉祥三年。日頃御寵愛を蒙りたる仁明天皇の。崩御ありしかば。之を悲しみ奉るあまり。御葬送の夜。たぐちに無常を觀じて比叡山に登り。剃髮して名を遍昭と改めたり。

たらちめは かゝれとしてしも うば玉の

我黒髮は 撫はずやありけん

とよめりしは。此時の事なりき。

遍昭俗なりし時に愛せし女あり。京都の五條に住みけるが。其もとへ袈裟を洗ひにやるとて。

霜雪の ふるやの下に 獨寐の

うつぶし染めの 麻の袈裟なり

とよみて贈りなごせし事はあれど。道心堅固にて。再び浮世を顧みる心は。

なかりしとぞ。

貞觀年中。常康親王のみづから住ませ給へる雲林院といふ寺を。賜はりしかば。それより之に住み。元慶三年權僧正に任ぜられ。光孝天皇の御宇となりて。元慶寺の座主となされ。仁和二年には。葦にて内裏に入るを許され。同年十二月には。仁壽殿にて七十の賀を賜はるの榮を得たり。天皇の御崇重。こゝに至りて極まれるを見るべし。元慶寺は花山にありて花山寺とも稱へられしを以て。世に遍昭を花山僧正と呼ぶ。和歌に妙なり。

宇多天皇の寛平二年に寂す。年七十六。俗なりし時の子二人あり。共に男子にて。長は左近將監なりしを。法師の子は法師がよきとて。剃髮せしめたり。素性法師これなり。

在原行平(朝臣)

在原業平の兄にて。左京の三條に奘學院を創建せし人なりき。弘仁九年に生れ。天長三年弟業平と共に在原の姓を賜はり。承和年中藏人より進み。侍従。右近衛少將。因幡守。兵部大輔。中務大輔。左馬頭。左兵衛

督。播磨守。信濃守。備前守。備中守。參議。檢非違使別當。左衛門督。藏人頭。太宰權帥。治部卿の諸官を経て。中納言に任じ。正三位に叙せられ。民部卿また陸奥出羽按察使を兼ねしが。年老いたるを以て官を辭し。寛平五年薨す。年七十六。和歌をよくせり。

尾崎雅嘉(天保の頃)いはく。俗説に行平須磨の浦へ流されし事を言ひ傳へたるのみにて。其事正史に見えざれば。いぶかしき事なれど。古今集雜の下に。田村の御時に。事にあたりて津の國須磨といふ處に。籠り侍りけるに。宮の内侍りける人につかはしける。とありて。

わくらはに 問ふ人あらば 須磨の浦に

もしほたれつゝ わぶと答へよ

といふ歌あり。云々。行平經濟の才ありて器量すぐれたる人なりし故。事務の事につきて。いさゝかさはる事などありて。おほやけの御咎にはあらねど。みづから須磨へ引き退かれたる事の有りしにや。暫しの事にて罪とすべき程の事ならざりし故。正史には載せられざりけるなるべし。

然るに此事につけて俗説に。松風村雨といふ二人の蛭に戯れられし事をいふは。西行の撰集抄に。昔行平の中納言といふ人。身にあやまつ事ありて。須磨の浦に流されて。もしほたれつゝ浦つたひしありきけるに。繪島の浦にてかつきする番人の中に。世の心にとまりけるにたより給ひしに。いづくに住居する人にかと尋ね給ふに。此蛭とりあへず。

白波の よする渚に 世をすこす

あまの子なれば 宿も定めず

とよみてまぎれき。といふ事あり。これらを傳へ誤れるなるべし。と。此物語を最も面白く書きなしたるは。謠曲の松風なりとす。

素性法師

僧正遍昭の子にて。在俗の時の名は良峰玄利。官は左近將監なりき。父の後を受けて雲林院に住み。權律師に補せられ。後大和の良因院に住みたり。

昌泰元年十一月廿一日。宇多法皇。寺の近きわたりなる宮の瀧御遊覽の御幸

ありける時。御道より。御使もて素性を召されしかば。素性馬に乗りて馳せ参り。笠を脱ぎ鞭を擧げて。所々の御案内申しぬ。法皇仰せられけらく。今日の供奉は皆俗なれば。素性の名また俗に従ふべしとて。良因院の文字を訓讀し。よしよりの朝臣と假に呼ばせ給へり。其夜なほ素性を御宿りに召して。良禪師は和歌の名人なれば。まづ歌よみて旅の心を慰めよとの仰を蒙り。よみける歌。

秋山に まどぶ心を 山川の

瀧のしらあわに けちやはてふん

没年月を知らず。

文屋康秀

父祖の名つまびらかならず。作者部類には元慶元年縫殿助に任せし事見え。古今集には参河椽になりて下る事を載せたり。和歌の名人とて世に傳へらる。

大江千里

大江音人の子なり。音人は清和天皇の御侍讀を勤め。勅によりて群籍要覽四

十卷。弘帝範三卷を撰び。又菅原是善と共に貞觀格式を撰せし人。千里また父の學を繼ぎて。兄玉淵。弟春潭千古と共に。學博く文を能くし。殊に千里は和歌に長じたり。

句題和歌は。勅により古人の詩句を題としてよみたるもの。寛平六年四月廿五日に奉れるよし。自ら序に記せり。唐の白居易の。不明不暗臚々月を反譯して。

照りもせず 曇りもはてぬ 春の夜の

ねぼろ月夜が めでたかりける

と詠せしも。其中の一つなりき。

伊豫權守と式部權大輔との二官のみ傳はりたれど。其他たよび生死年月を知らず。

菅原道眞

右大臣としての菅公は。歴史の委しく語るところなれば言はず。筑紫謫居の菅丞相は。世人の既に熟知するところなれば略して。こゝには文學家として

の菅家を紹介するに止めんとす。  
道真字は三<sup>さん</sup>。幼名は阿呼<sup>あへ</sup>。参議是善<sup>はらち</sup>の三男なり。文章博士より進みて。延喜  
年中右大臣に至る。

幼にして才學ならぶものなく。十一歳の時。月輝如晴雪。梅花似照星。可憐  
金鏡轉。庭上玉房馨。と作れる詩など。人口に膾炙せり。

寛平四年勅を奉じて。類聚國史二百卷を撰び。同じき七年。醍醐天皇のまだ  
皇太子と申ししが仰を受けて。一時間に十首の詩を作れり。すなはち其日の  
酉の時より戌の時までに成れりと云ふ。翌年又同じ皇太子の仰ありて。二時  
間に二十首の詩を賦して奉れり。此事古今に類なしとて。時の人驚かざるは  
無かりき。

かくて醍醐天皇の御宇に至り。御信任一方ならざりしが。遂に左大臣藤原時  
平のために陥れられて。太宰権帥となり。筑前に左遷せられしは。昌泰三年  
の正月なりき。うの家を出でんとして。庭前の梅に向ひ。

東風ふかば にほひれこせよ 梅の花

あるじなしとて 春を忘れり

とよめりし歌。道なる明石の驛にて作れる。

驛長莫驚時變改 一榮一落是春秋

また太宰府にて作れる。

離家三四月 落涙百千行 萬事皆如夢 時々仰彼蒼

れよび。

都府樓纒看瓦色 観音寺唯聽鐘聲

天の下 かわける程の なければや

着てしぬれぎぬ ひるよしもなき

去年今夜侍清涼 秋思詩篇獨斷腸 恩賜御衣今在此

捧持毎朝拜餘香

の數篇。一たび吟じて誰かは袖を濡さざるべき。

延喜三年二月廿五日。配所に薨ず。年五十九。のち天皇これを御後悔ありて。  
道真の官位を復し。更に正二位を贈らせ給ひしが。一條天皇は又左大臣を。

又つゞいて正一位太政大臣を贈らせ給へり。道真もし靈あらば。地下に聖恩の優渥なるに泣くべきなり。著すところ。菅家文草。菅家後集。菅家萬葉集。また後の人の集めたる菅家御集歌集などあり。

紀友則

紀貫之の従弟なり。宮内權少輔有友といひし人の子ともいひ。又は紀有常の子なりとも傳ふ。寛平年中土佐椽少内記となり。延喜年中大内記に進み。古今和歌集撰者の一人に加はりたり。延喜五年二月卒す。年六十一。和歌を以て名あり。

伊勢

伊勢守藤原繼蔭の娘なりければ。父の官によりて伊勢と呼ばれたり。初め宇多天皇第四の皇子。敦慶親王に寵せられて中務女王を生み奉りしが。親王御早世の後。七條皇后に仕へ申しけるが。遂に宇多天皇に召されて。桂の宮行明親王を生み奉りしに依り。伊勢の御息所とも。伊勢の御とも稱へら

る。歌の上手なりし事は。時の尉恒貫之にも劣らずと評せられたる程なりき。天皇御讓位ありて法師とならせ給ひし後は。世の變遷を感じ。五條なる家に籠り居つゝ。あはれに年月を送りし内にも。風流古雅なりし住居のさまは。寫し出だされて今昔物語語にあり。曰く。庭の木立きはめてをぐらくて。前栽いみじくをかしく植ゑたり。庭は苔砂青みわたり。三月ばかりの事なれば。前の櫻れもしろく榮ゆ。寢殿の南れもてに。帽額の簾とところぐ破れて神さびたり。云々。簾をかきあげて見れば。母屋の簾はねろしたり。朽木形の几帳の清げなる。三間ばかりに添ひて立てたり。西東三間ばかりのきて。四尺の屏風の半なれたる立てたり。母屋の簾にうひて。高麗縁の疊を敷きて。其上に唐錦の茵敷きたり。板敷のみがふれたること鏡の如し。影のこりなくうつりて見ゆ。と。後賣りたる事の古今集に見わたるは。此家にやあらずや。又二條にも住みたる事ありしと見えて。藤原清輔の袋草子に曰く。能因兼房が車のしりに乗りて行く時に。二條東洞院にて俄に下りて數町歩行す。兼房驚きて之を問ふ。

能因いはく。伊勢の御が家の跡なり。前栽の結松いまに侍る。いかでか乗りながら過ぐべきとて。松の梢の見ゆるまで車に乗らざるなり。と。  
 又北村季吟(元祿の頃)いはく。墓は攝津の國。能因が舊跡古會部といふところの上に。伊勢寺とてあり。近き頃永井日向守殿再興し給ひ。林道春法印に其碑を書かせたり。と。今も存してありやいかん。

中務なかつかき

中務卿敦慶親王の御娘。母の伊勢なる事は既にいへり。  
 和歌をもて當時に名譽を得たる一事をいはく。西行の撰集抄に曰く。むかし九條殿にて。さるべき人々。七夕に扇合の侍りけるに。中務と聞えける女房の扇に。

天の川 川邊すゞしき 七夕に

扇の風を なほや貸さまし

といふ歌を書きたりけるを。殿を始め奉りて。人々手毎に取り傳へて。殊感の侍りけり。元輔の扇の遅く参りてありけるを見給ふに。をか上げなる手に

て。

天の川 扇の風に 霧はれて

空すみわたる 鵲の橋

といふ歌を不書き侍りける。面白さ分くかた無かりければ。此二つの扇勝に定まりて。其外のゆゑしかりける扇どもは。花のあたりの深山木の心地して。心留め見る人もなかりけり。と。但し拾遺和歌集などによれば。天祿四年五月廿一日。圓融天皇一品の宮に渡らせ給ひて。亂基とらせ給ひける時の負わざを。七月七日かの宮より内の臺盤所に奉られける扇に。張られたりける薄物に織りつけたる。とあり。何れか事實ならん。

藤原兼輔ふじはらのかねすけ(朝臣)

藤原良門よしみかどの孫。右中將利基ともしもとの子なり。鴨川堤の下に家居せしによりて。堤中納言と呼ぶ。和歌の名人にして。堤中納言物語の作あり。  
 讃岐椽より進みて従三位中納言に至り。右衛門督を兼ね。承平三年二月十八日卒す。年五十七。子四人あり。雅正よしまさ。清正よしみさ。守正もりまさ。庶正もろまさといふ。

檜垣姫

筑紫の遊女なりしが。始は筑前に住み。後肥後に住みたりといふ。老いて後和歌を以て世に名を知られたり。

源宗子(朝臣)

光孝天皇の皇子式部卿是忠親王の御子なり。一説には。仁明天皇の皇子本康親王の御子とも云ふ。正四位右京大夫にて天慶三年卒す。歌人の名高し。

大友黒主

近江の人にて滋賀郡の大領となり。又園城寺神祠の別當となる。延喜の頃の人なり。和歌を以て稱せらる。

凡河内躬恒

父の名は良高なりとも。諱利なりともいひて。詳ならず。寛平年中甲斐少目に任ぜられ。延喜年中御書所に候して。紀貫之と共に古今和歌集を撰じ。のち丹波権目淡路權様を経て。和泉大掾となれり。醍醐天皇ある時躬恒を階下に召し。月に弓張の名あるは如何なる故ぞ。勅

問ありけるに。躬恒とりあへず。

照る月を 弓張としも いふことは

山の端さして 入ればなりけり

と詠じて奉りしには。叙感淺からずましくて。御衣を賜はりける事。傳へて大和物語にあり。和歌の名人として。紀貫之と共に並べ稱せらる。

坂上是則

若くして御書所に候し。延喜八年大和少掾に任ぜられ。尋いで同國の大掾となり。小監物中監物少内記を経て。大内記に至り。延長二年從五位下に叙し。加賀介に進みぬ。

是則和歌の名高きのみならず。又蹴鞠の達者なりき。延喜の御時。勅により仁壽殿に於て物せし時は。二百六度まで連足に蹴て。一つも落さざりしかば。特に叙感ありて。絹を賜はりしとぞ。

子あり望城といふ。後撰和歌集の撰者に加へられたるは是なり。

紀貫之

貫之は中納言長谷雄の孫。望行の子にて。祖父は漢學者。父は歌人なりしなり。

官位は高からずして。越前椽少椽。内膳典膳。少内記。大内記などを経て。

加賀介。美濃介となり。大盃物。左京亮より進みて。延長八年土佐守となり。

天慶年中玄蕃頭より木工權頭となり。位は從五位上にて。天慶九年卒せり。

されども歌文の達人たりしたため。延喜年中御書所預となり。古今和歌集撰

者の筆頭に推されしは。人の知るところなり。

撰べる書には。古今和歌集の外に。萬葉集鈔ありといへど。世に傳はらず。

又土佐守となる前に。新撰和歌集を撰ぶべしとの勅を奉じけるが。其任所よ

り歸りて後。いまだ奏覽を経ずして崩御にあひ奉りしかば。世に其書の名高

からず。歌集は貫之集とて。歌仙家集の大なる部分を占めたり。

散文の世に傳はるものは。古今和歌集の序。大井川行幸和歌の序。土佐日記

の三種あるのみ。

世に傳ふ。貫之紀伊に旅せし時。和泉にて俄に乘馬の進まざりしに。こゝは

蟻通明神の社前なれば。乗打する無禮を神の咎め給ふならんと。人の告げしかば。貫之急ぎ下馬して。

かきくもり あやめも知らぬ 大空に

ありとほしをば 思ふべきかは

と詠じ。神に謝し奉りしと。

貫之に男子あり。時文とて和歌をよくす。女子も才女の名ありて内侍となり。

古今和歌六帖を撰べり。一名を紀氏六帖ともいふ。

清原深養父

生死年月詳ならず。筑前介海雄の孫にして。豊前介房則の子なりといへり。

和歌にすぐれたるは。古今和歌集にあまた撰び入れられしにても知らるべし。

壬生忠岑

古今和歌集撰者の一人なり。はじめ左近衛番長なりしが。後に右衛門府生となれり。

忠岑禁中の歌合に。



ありあけの つれなく見えし 別より

あかつきばかり うきものはなし

の歌をよみて。微感を辱し。遂に擢でられて。御隨身となり。昇殿を許され。御書所に候するの榮を得るに至りしとぞ。

藤原信明

藤原公忠の子にて陸奥守たり。和歌をよくし。康保二年卒す。

齋宮女御

御名は徽子。重明親王の御娘なり。八歳にして齋宮に立ち給ひ。十九歳の時入内して。村上天皇の女御となり給ひ。麗景殿の女御と呼ばれ給へり。前の齋宮におはしつかば。齋宮の女御とも申すなり。和歌の御名殊に高く。又琴をもよくし給へり。ある時天皇村雨に驚かせ給ひて。急ぎ渡らせ給ひしかば。女御。

雨ふらば 三笠の山も あるものを

まだきにさわぐ 雲のうへかな

とよませ給ひし事。世に普く申し傳へたり。

藤原道綱母

藤原倫寧の娘にて。東三條攝政兼家の妻にて。和歌にすぐれ文をよくせり。蜻蛉日記は。天曆八年より天延二年まで。二十一年間の自記にて。折に觸れ時に感じ。移りゆく心のまゝを。事實と共に秘せず。飾らず記せる文なり。都人 寐て待つらめや ほとくさす

今は野山を 鳴きて出づなり

の歌は拾遺和歌集に入りたるが。藤原清輔は評して。昔より五首ありといふ時鳥名歌の一なるべしといへり。

源順

源允舉の子にて。學和漢を兼ね。後撰和歌集撰者の一にも加はり。能登守に任ぜられて。永觀元年卒す。年七十三。

著作にて名高きは。和名類聚鈔なり。古來世俗に。竹取物語空穂物語の作者を。順なりと誤り傳へたるは。その和文大家として知られしが故ならん。惜

しむべし世に残れるは和歌のみにて。散文の散りのこりだに無き事よ。

清原元輔

清原深養父の孫。下野守顯忠の子。清少納言の父なり。天曆年中勅を奉じて後撰和歌集を撰びぬ。位は從五位上。官は肥後守を終として。永祚二年卒す。年八十三。殊に和歌を以て名を知らる。

平兼盛

光孝天皇の皇子是忠親王の御曾孫。太宰少貳篤行の子なり。位は從五位上。官は駿河守を終として。正暦元年十二月卒す。和歌の名人なりき。

天徳年中禁中に歌合ありける時。兼盛は左方にして。競争者は右方の壬生忠見なりしが。兼盛は。

忍ぶれど 色に出でにけり 我戀は

ものや思ふと 人の問ふまで

といふ歌をもて勝ちたりと聞き。喜悅れくあたはず。他人の勝負は聞くにも及ばで。拜舞しつゝ退出せしとぞ。うの歌に執心なりし思ひやるべし。

壬生忠見

忠峯の子にて同じく歌よみの名あり。幼名を多々といひ。後忠實と改め。又忠見と改めたり。幼かりし時。家貧しくて攝津に住みけるが。歌よくよむと聞き召し。内裏より召ありけるに。乗物の候はねばと辭し申したれば。重なれば竹馬に乗りてと。重ねて勅命あり。之に答へ奉るとて。

竹馬は 節鹿毛にして いとよわし

いまゆふかげに 乗りて参らん

とよみて奉りし事ありき。

天曆の頃攝津權大目となりたるが。内裏の天徳歌合に召されしかば。田舎裝束のまゝにて出仕せり。昔忘れぬ心掛の風流なるを思ふべし。

大中臣能宣

神祇大副祭主賴基の子。後撰和歌集撰者の一人なり。能宣も父の官を繼ぎて。大副祭主となり。正暦二年八月九日卒す。年七十一。能宣若かりし時。入道式部卿の宮の御子の日に参りて。

千年まで 限れる松も 今日よりは

君に引かれて 萬代や經ん

と祝ひ申したるよしを。父頼基に語りしかば。父は傍なる枕を投げつけ。大に怒りて曰く。汝今親王の御子の日に斯かる最上の歌をよまば。主上の御子の日に逢ひ奉らん日。いかなる言もて祝ひ奉らんとするぞ。と。此父にして此子あり。二代和歌もて世に鳴りたるも。宜ならずや。

曾禰好忠

圓融天皇の頃の人。丹後椽なりしにより。姓の頭字と連ねて。曾丹後椽と呼ばれしが。うの後は曾丹後。また曾丹と呼ばるゝに至りしかば。好忠これを聞きて。あゝ己が名は。つひにうたと呼ばるゝに至らんと。嘆息せしといふ。和歌には斬新なる作ねほし。

藤原實方

左大臣師尹の孫。侍從定時の子なり。叔父濟時に養はれて其子と爲る。一條天皇に仕へて。侍從右兵衛權佐より左近衛中將に進みぬ。

ある時他の殿上人と花見に物じけるに。村雨にはかに降り来りければ。實方ことさらに。花の木陰に立ちより。

櫻がり 雨は降り来ぬ 同じくは

ぬるとも花の 陰にやどらん

と吟じつゝ。装束もしぼるばかりにぬれて立ちたる事あり。藤原行成これを聞きて。歌は面白けれども。振舞こそをこがましけれど。評せしかば。是より實方ふかく恨を含み。後日少しの爭論より。笏もて行成の冠を庭に打ち落としぬ。この狼藉により實方は勅勘を蒙りて官を除かれ。歌枕見て參れとて陸奥に遣されたり。

かくて實方つひに陸奥に卒せしは。長徳四年なりき。

源重之

清和天皇の皇子貞元親王の御孫。侍從兼信の子なりしが。養はれて伯父兼忠の子と爲る。進みて相摸權守に至りしが。長保年中陸奥にて卒せり。和歌を以て名あり。

### 第三十一章 散文の作例

#### 龍の首の玉

作者しらす

大伴の御行の大納言は。我家にありとある人を召し集めて。のたまはく。龍の首に五色の光ある玉あり。それを取りて奉りたらん人には。願はん事をかなへんと宣ふ。

をのことも仰のことを承りて申さく。仰の事はいと尊し。たゞし此玉はやすく得取らじを。いはんや龍の首の玉はいかに取らんと。申しあへり。

大納言のたまふ。君の仕といはんものは。命を捨てとも。おのが君の仰事をばかなへんとこそ思ふべけれ。此國になき天竺もろこの物にもあらず。この國の海山より龍はありのぼるものなり。いかに思ひてか汝等かたき物と申すべき。

をのことも申すやう。さらばいかゞはせん。かたき物なりとも。仰にし

たがひて求めにまからんと申す。

大納言見わらひて。汝等君のつかひと名を流しつ。君の仰事をばいかゞは背くべき。そのたまひて。龍の首の玉取りにぞて出だし立て給ふ。此人々の道の糶くひものに。殿の内の絹綿錢など。ある限り取りいでそへてつかはず。この人々ども歸るまで。いもひをして我は居らん。此玉取り得では家に歸りくなと。のたまはせけり。

おの／＼仰承りてまかりいでぬ。龍の首の玉とりえずは歸りくなと。のたまへば。いづちもく足の向きたらん方へ。いなんとす。かゝるすきごとをし給ふ事と。譏りあへり。賜はせたる物は。おの／＼分けつゝ取り。あるひはねのが家に籠りぬ。あるひはおのが行かまほしき處へいぬ。親君と申すとも。かくつきなき事を仰せ給ふ事と。ことゆかぬ物ゆゑ。大納言を譏りあひたり。

かくや姫すゑんには。例のやうにては見にくしと宣ひて。うるはしき屋を作り給ひて。漆を塗り蒔繪をし。いろへしたまひて。屋の上には。糸